原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第4集

原の辻遺跡・鶴田遺跡

幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う緊急発掘調査報告書Ⅲ

1998

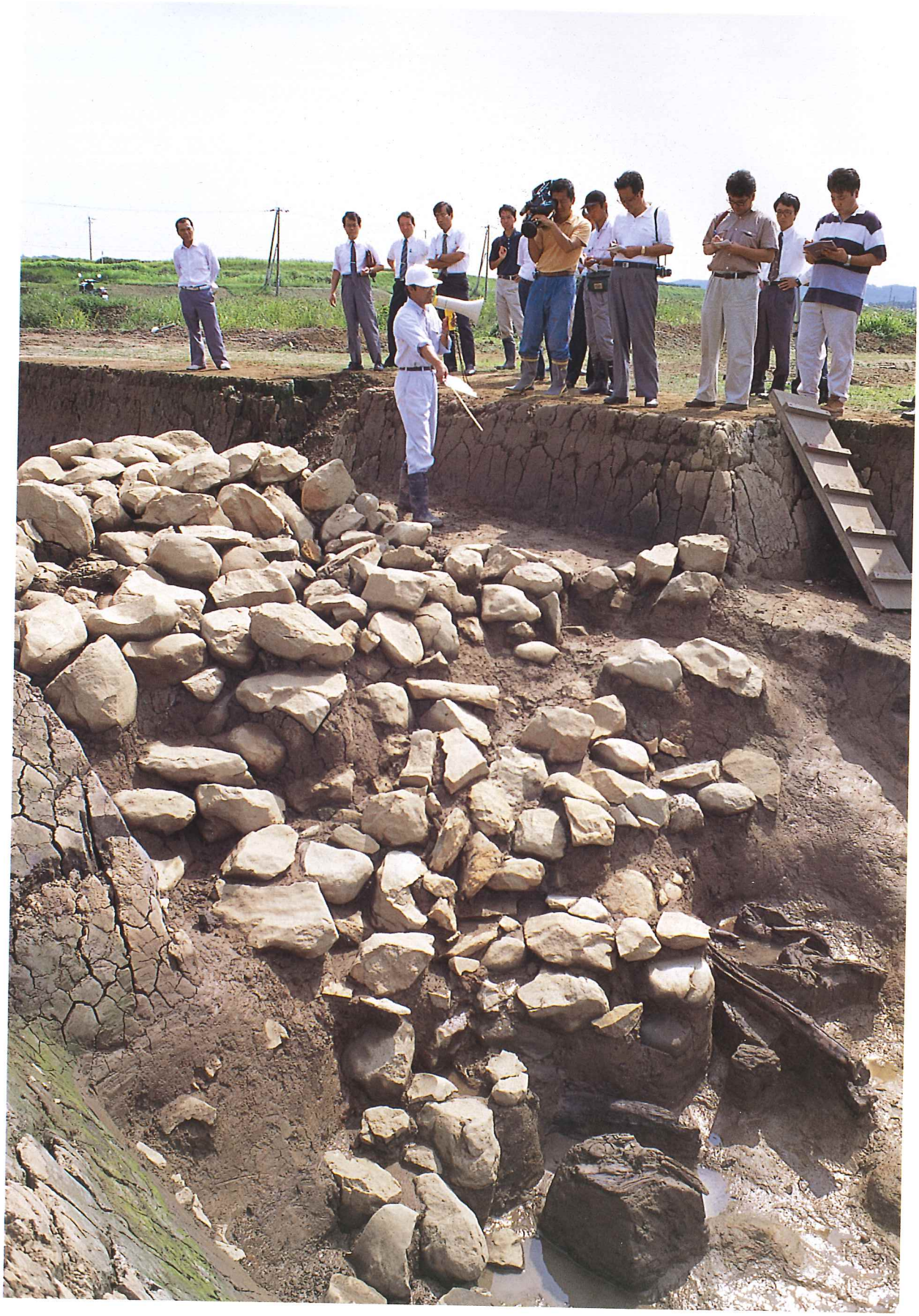
長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第４集

原の辻遺跡・鶴田遺跡

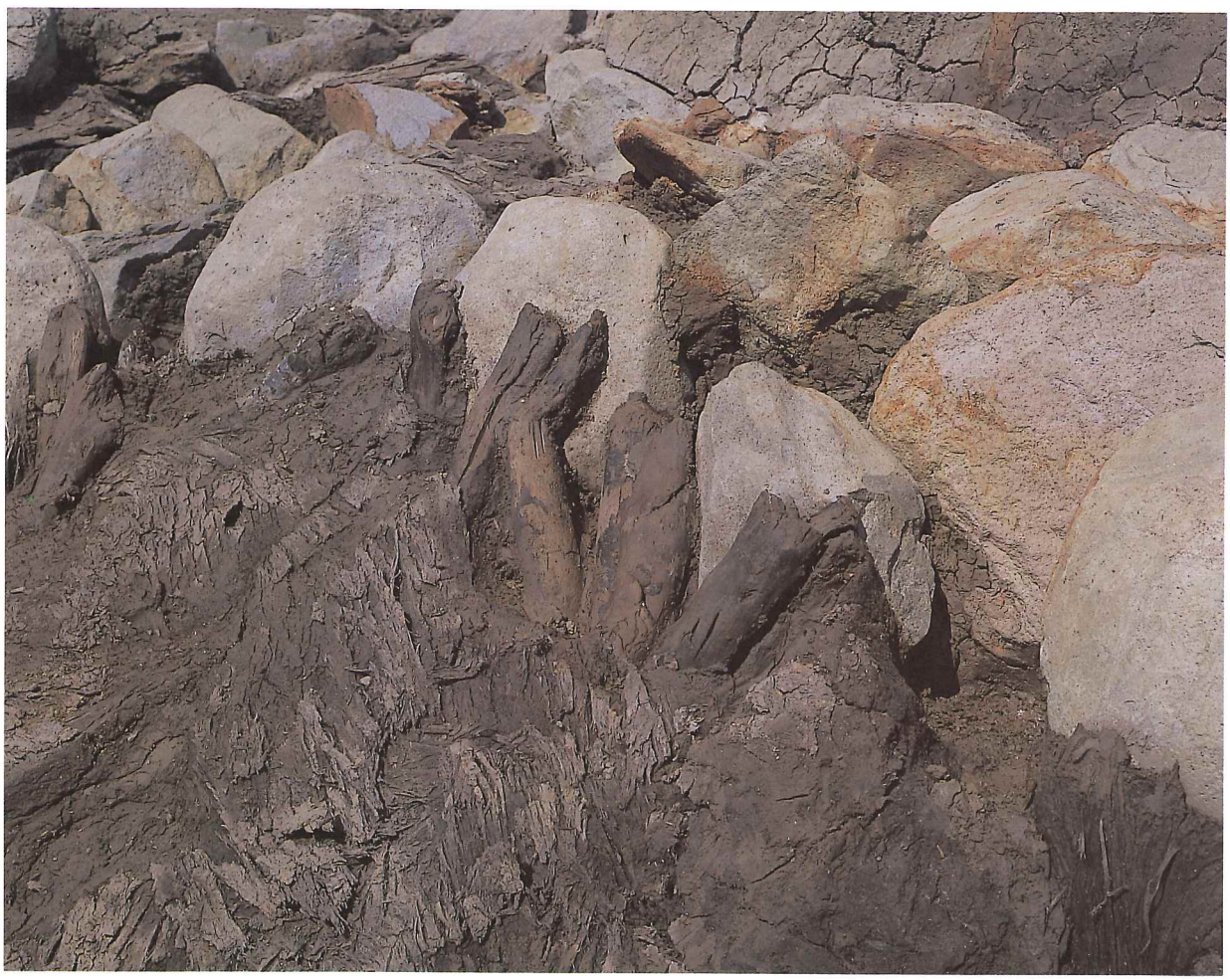
幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書Ⅲ

船着場跡（西から）



船着場跡西側突堤（北から）

船着場跡東側突堤（東から）



樹皮による補強状況（西から）

石組遺構（南から）

発刊にあたって

本書は，幡鉾川流域総合整備計画に係わる県営圃場整備事業の農道・排水路造成工事に伴って，平成８年度に実施した原の辻遺跡と鶴田遺跡の緊急発調査報告書です。

原の辻遺跡の調査では，日本最古の船着場跡や石組遺構，水田畦畔遺構が確認されました。

この船着場跡は，遺構の規模が大きく，また，大陸から伝えられた当時の最先端技術による工法も明らかとなり，大型の施設が，原の辻遺跡に存在していたことが確認され，話題となりました。

石組遺構は，船着場跡に伴う通路の可能性があります。水田畦畔遺構は，原の辻遺跡では最初の発見となり，台地部西側にも，弥生時代の早い時期から水田が広がっていたことが確認されました。

原の辻遺跡は，弥生時代の重要な遺跡として平成９年９月２日に国指定を受けました。この貴重な遺跡を後世に伝えることは，私たちの重要な務めであります。現在，遺跡保存整備委員会において遺跡の保存と活用のための検討がなされていますが，地域住民の方々のご理解とご協力をいただきながら，文化財保護担当部局と開発部局との連絡調整を図っていくことも大切であると考えます。

今回の発掘調査の成果を，文化財保護と学術的な資料として活用していただければ幸いです。

平成10年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　中　川　　忠

例　　言

1．本書は，幡鉾川流域総合整備計画に係る県営圃場整備事業の農道・排水路工事に伴って実施した，平成８年度の原の辻遺跡（不條・八反・鐙ノ池地区），鶴田遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は，ＩとII１．を西　信男，II２．を松永秦彦(芦辺町教委)，IIIを川口洋平が，それぞれ分担して行なった。

3．本書の編集は，西が行なった。

4．本書に関する出土遺物と図版及び写真類は，原の辻遺跡調査事務所に保管している。遺物の一部は，「壱岐・原の辻展示館」において展示保管する。

5．本書の作成は，原の辻遺跡調査事務所外業作業員と内業整理員の方々の協力によって作成することができました。ここに深く感謝いたします。

総　目　次

Ⅰ．地理的・歴史的環境……1
1．地理的環境……1
2．歴史的環境……1

Ⅱ．調　　査……5
1．平成８年度原の辻遺跡（県教委・石田町教委分）の調査……5
(1)　調査概要……7
(2)　遺　　構……15
(3)　遺　　物……39
(4)　ま と め……46
2．平成８年度原の辻遺跡（芦辺町教委分）の調査……61
(1)　調査概要……63
(2)　遺　　構……67
(3)　遺　　物……67
(4)　ま と め……68
3．平成８年度鶴田遺跡の調査……75
(1)　遺跡の立地……77
(2)　調査経緯と関係者……77
(3)　調査概要……77

Ⅰ．地理的・歴史的環境

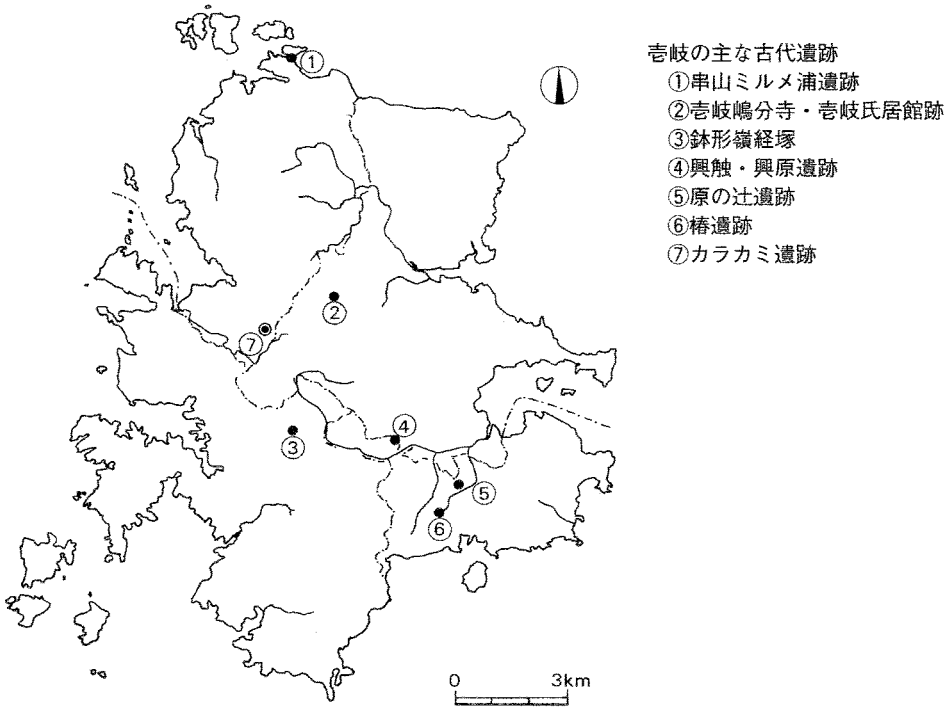
１．地理的環境

壱岐は，九州本土と朝鮮半島の間に位置し，壱岐・対馬間約48km，壱岐・松浦半島間約20km，壱岐・福岡県糸島半島間約33kmと，古来より大陸文化の中継地点として重要な役割を果たしてきた。反面，刀伊の来襲や元寇によって被害を受けたり，また，防人を設置したりするなど常に外敵の襲来におびえ続けてきた。壱岐島は，東西約14.8km，南北約17.2km，面積約138.12kmの本島と26余りの付属島から成り立っている。行政的には現在４町に分かれており，約人口３万５千人を数える。島の基盤は第３紀層で，全体的になだらかな玄武岩台地で，最高峰の岳の辻でも213mにすぎない。島の南東部には「深江田原」(約200ha) と呼ばれる平野があり，長崎県下では，最大の沖積地として，また，後世の干拓による県央部の諫早平野を除けば，県下最大の穀倉地帯として有名である。この深江田原を東に向かって流れ，内海に注いでいるのが，延長９kmの幡鉾川である。また，幡鉾川の支流の池田川が，深江田原を南から北へ流れている。遺跡は幡鉾川の南側一帯に広がっていて，今回の調査地点は，幡鉾川の南側，台地部(南から川に直交する形で突出した南北1000m，東西250m，標高18m前後の舌状台地，台地中央部が高く，北端部との差は約３m) の西側にあたる一帯である。

２．歴史的環境

壱岐は，歴史的には，「一支国」として３世紀の歴史書『魏志倭人伝』に登場してくる。その当時の一支国は「官をまた卑狗といい，副官を卑奴母離という。竹林・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があり，田を耕してもなお食べるには足らず，また，南北に行き米を買うなどする。」状況であり，人々が活発な交易活動を行っていたことを物語っている。原の辻遺跡は大正時代から紹介されており，以来，東亜考古学会や九学会，長崎県教育委員会によって，調査が行われてきた。平成５年度の調査では，丘陵部を取り巻く多重環濠が確認されて注目を浴びた。また，平成６年度からの調査では，弥生時代の旧河道や土壙群，古代の道路状遺構が確認されている。原の辻遺跡は，壱岐島内の弥生時代の遺跡の中でもっとも規模が大きく，出土遺物の質・量ともに群を抜いているところから，現在，「魏志倭人伝に記された国の都が特定されている唯一の遺跡」である。原の辻遺跡は古墳時代初頭まで続いたと考えられるが，古墳時代初頭以降どうなったか知る手掛かりは少ない。再び人々の活動が認められるのは平安時代になってからで，遺跡南端に公的な施設などが建てられたことが推測されている。

島内では，原の辻遺跡に次ぐ弥生時代の遺跡としては，島の北西部にあるカラカミ遺跡が知られている。壱岐西岸の深い湾入部を持つ片苗湾とそれに続く刈田院川流域に近く立地しており，大正時代から紹介されてきた。環濠を巡らす集落であり，貴重な青銅器を出土するなど原の辻遺跡との類似点



第1図　壱岐の主な古代遺跡

も多いが，規模は原の辻遺跡に比べると小さく，青銅器保有量も少ない。過去の調査によるとカラカミ遺跡の萌芽期は弥生時代前期後半頃からみられ，中期後半以降，後期中頃に最盛期を迎え，後期末には急激に衰亡したと考えられている。

古墳時代になると，遺跡は数多いけれども，弥生時代から連続するものではなく，壱岐最古の古墳と考えられているのは，5世紀に築かれた大塚山古墳である。6世紀から7世紀になると，古墳は集中的に造られるようになる。なかでも，県内最大規模（全長約90m）の前方後円墳である双六古墳，同じく県内最大規模（直径約45m）の円墳である鬼の窟古墳，金銅製馬具が出土した，直径約38mの笹塚古墳などが有名である。

8世紀にはいると，壱岐は国としての扱いを受けるようになり，国府が設置された。国府の場所については諸説あり，場所は特定されていない。しかし，原の辻遺跡で平成5年度以降に行われた調査によって，奈良から平安時代の木簡，硯，初期貿易陶磁器，施釉陶器が出土しており，古代の道路状遺構も確認され，国府の設置場所の解明に役立つと思われる。

参考文献

1．長崎県教育委員会『原の辻遺跡』長崎県文化財報告書第26集　1976
2．長崎県芦辺町教育委員会『壱岐嶋分寺II』芦辺町文化財報告書第7集　1993
3．長崎県芦辺町教育委員会『壱岐嶋分寺III』芦辺町文化財報告書第8集　1994
4．長崎県芦辺町教育委員会『原の辻遺跡』芦辺町文化財報告書第9集　1995
5．長崎県石田町教育委員会『椿遺跡』石田町文化財報告書第1集　1996
6．長崎県勝本町教育委員会『カラカミ遺跡』勝本町文化財報告書第3集　1985

第2図　原の辻遺跡・鶴田遺跡位置図

II. 調　　査

1．平成 8 年度原の辻遺跡(県教委・石田町教委分)の調査

1．平成8年度原の辻遺跡（県教委・石田町教委分）の調査

(1) **調査概要**（第1図，第2図①～③）

今回は，県営幡鉾川流域総合整備計画（平成4年度～平成13年度）区域内の範囲確認調査を平成3年～4年に実施した結果に基づき，関係各機関との協議を行い，農道・排水路計画地域の不條・八反地区面積1,824㎡，鐙ノ池地区271㎡について調査を行った。なお，芦辺町教育委員会が，不條地区を445㎡，石田町教育委員会が，鐙ノ池地区を66㎡調査している。

調査対象地区は，丘陵部の西側，幡鉾川の南側に広がる標高6m前後の水田地帯である。調査区は，原の辻遺跡基準点より緯度経度を求めて設定した。農道計画地域は，東西軸に沿って東からB－1区～B－6区，C－0区～C－8区，D－1区～D－6区を設定し，排水路計画地域は南北軸に沿って北からA－1区～A－25区，E－1区～E－9区と，F－1区～F－6区を西から設定した。基本的なトレンチは，A区は東西幅1.5m，南北幅19.0m，（A－1区，A－25区は東西幅1.5m，南北幅6.0m）B区は東西幅19m，南北幅5.0m，（B－6区は東西幅5.0m，南北幅5.0m）C区は東西幅2.0m，南北幅10.0m，D区は東西幅19.0m，南北幅5.0m（D－6区は東西幅5.0m，南北幅5.0m）E区は東西幅1.5m，南北幅19.0m（E－2区は東西幅10m，南北幅1.5m，E－9区は東西幅1.5m，南北幅11.0m）F区は東西幅10.0m，南北幅1.1mである。

次に各トレンチ単位での概要説明にはいる。

A－3区からA－5区にかけて，旧河道が検出された。

A－9区からA－10区にかけて，旧河道が検出された。

B－1区からB－2区にかけて，溝が検出された。

A－11区からB－5区，B－6区にかけて船着場跡が検出された。

A－13区からA－14区にかけて，北・南石組遺構が検出された。

A－17区からA－18区にかけて，水田畦畔遺構が検出された。

A－24区から，濠が検出された。

D－1区から，旧河道と溝が検出された。

D－2区から，溝と濠が検出された。

D－3区から，溝が検出された。

D－4区，D－5区から，溝が検出された。

E－1区から，溝が検出された。

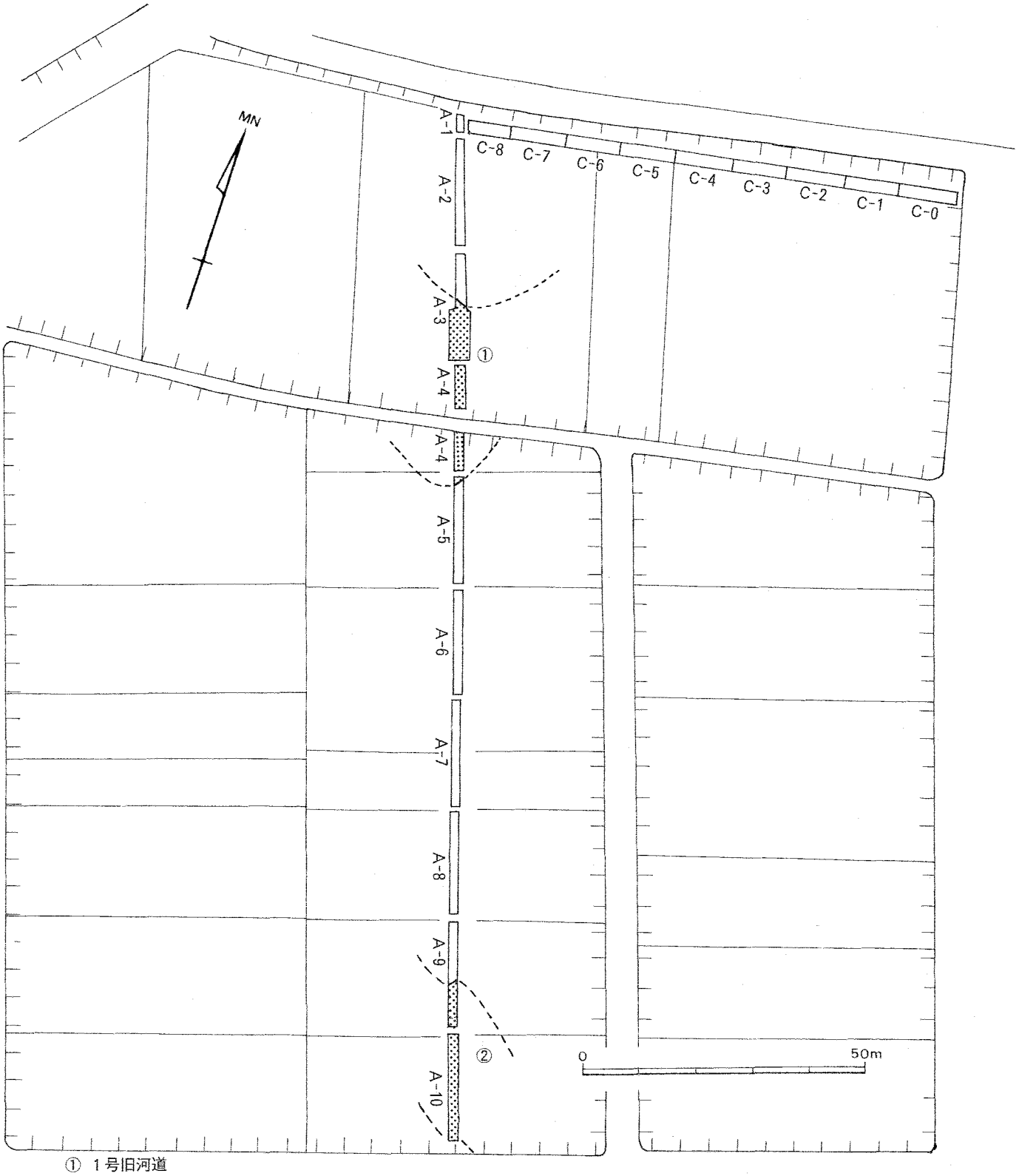
E－3区から，溝が検出された。

E－5区からE－6区，E－7区にかけて，旧河道が検出された。E－6区は，溝も検出された。

その他のトレンチからは，特に遺構らしきものは検出できなかった。

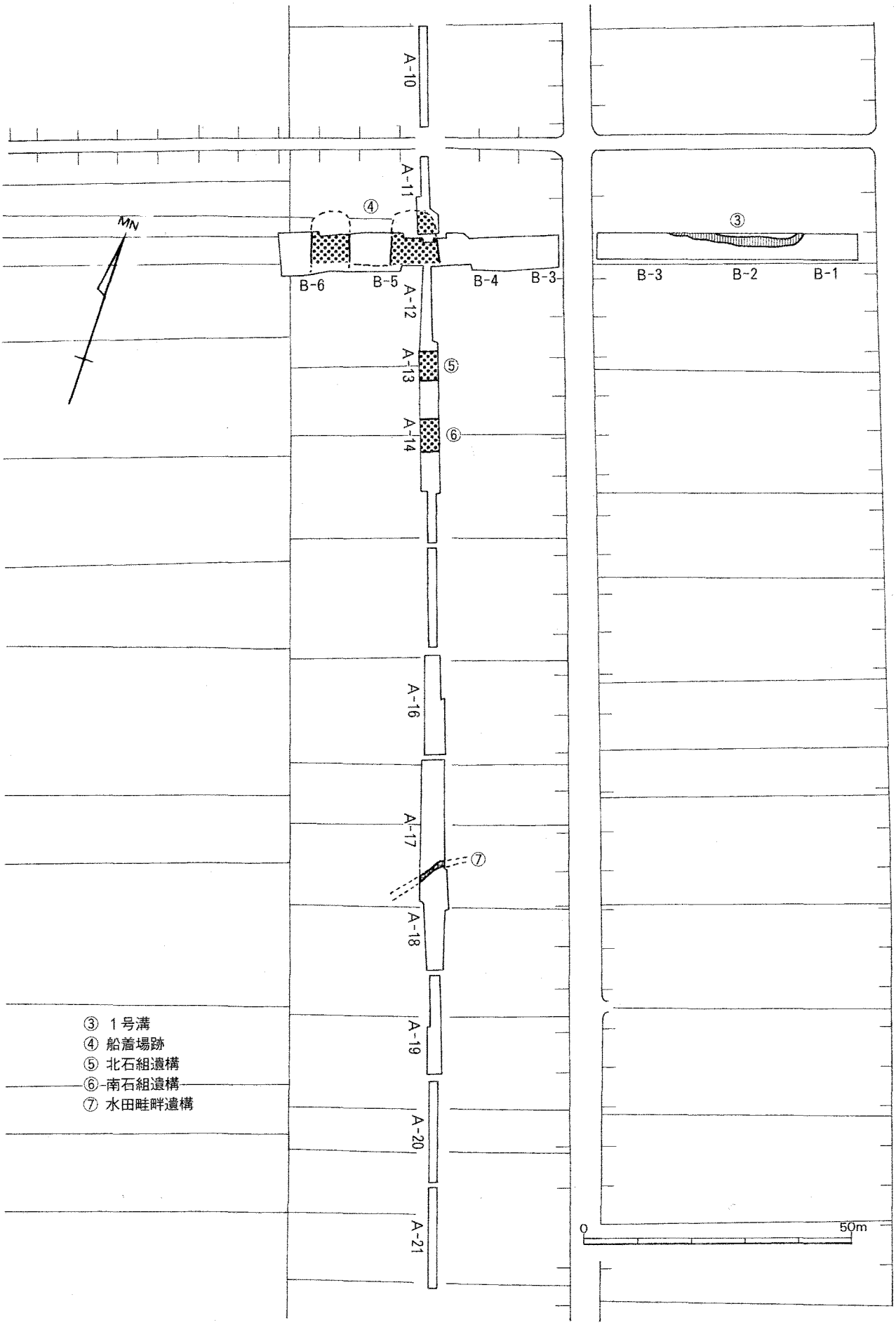
今回の調査では，荒天によりトレンチが崩壊し，危険防止のためにトレンチの拡幅を行ったり，また，船着場跡や水田畦畔遺構，濠などの確認の為にトレンチの拡幅を行ったため，最終的には2,606㎡の調査面積となった。

第１図　八反・不條・鐙ノ池地区調査区位置図（１／1000）

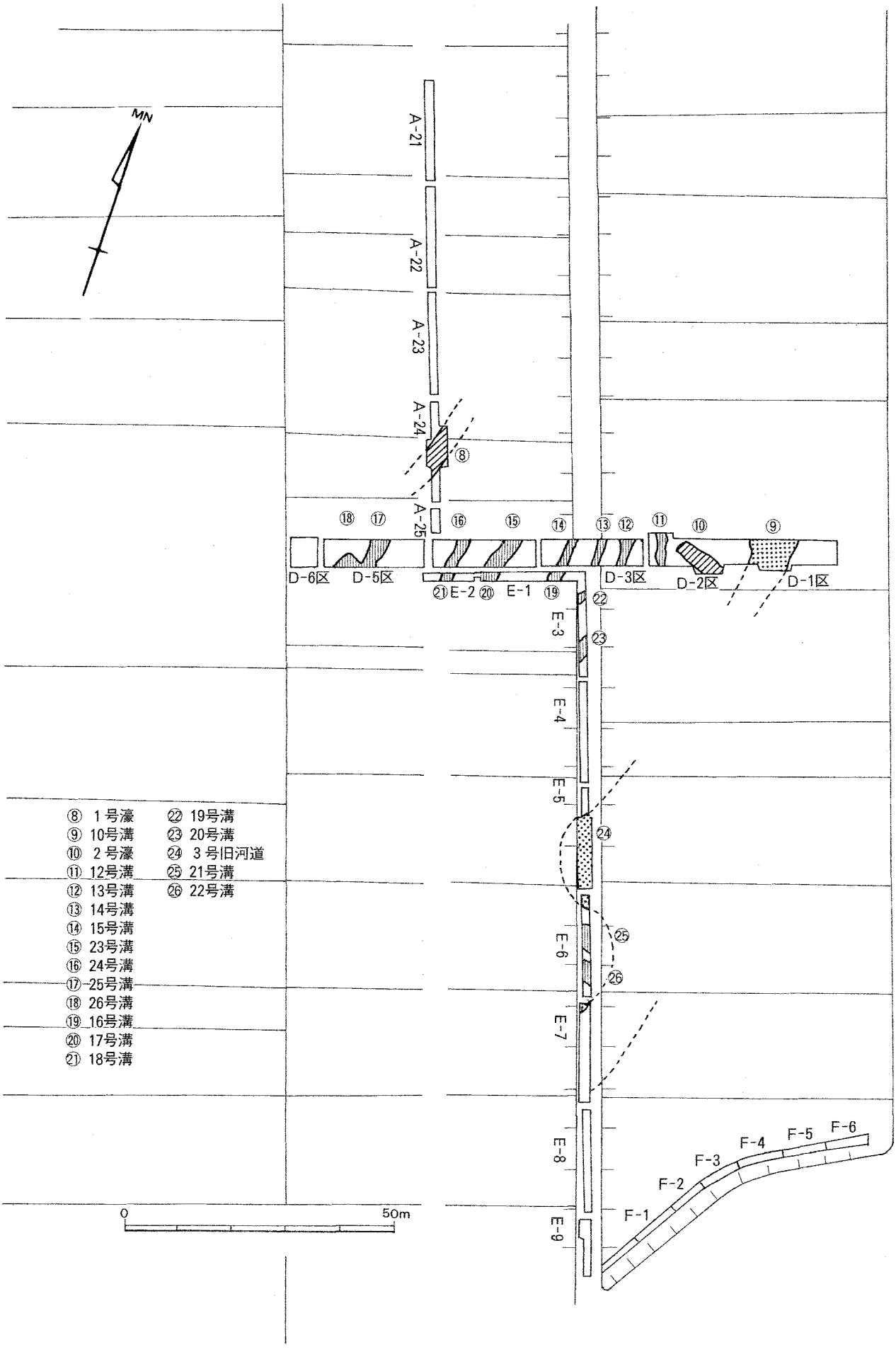


① 1号旧河道
② 2号旧河道

第2図　調査区及び遺構配置図①（1／1000）



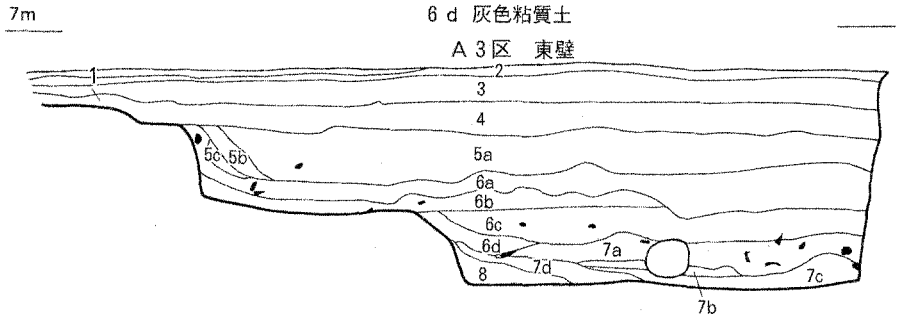
第3図② 調査区及び遺構配置図② (1／1000)

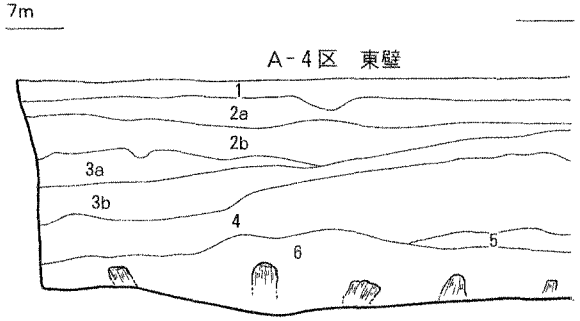


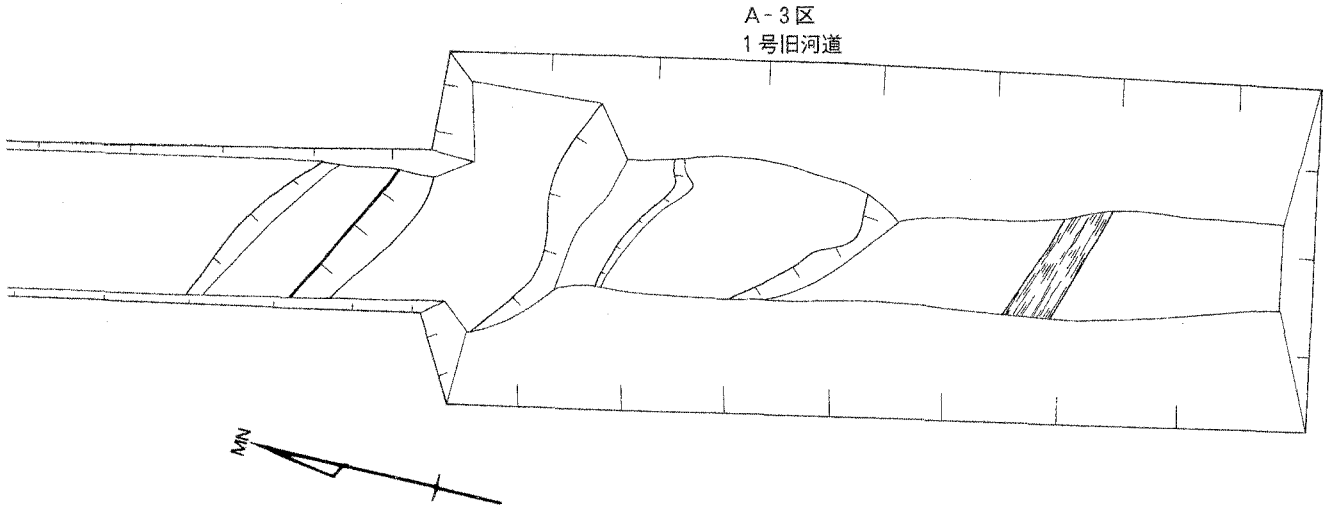
第4図　調査区及び遺構配置図③（1／1000）

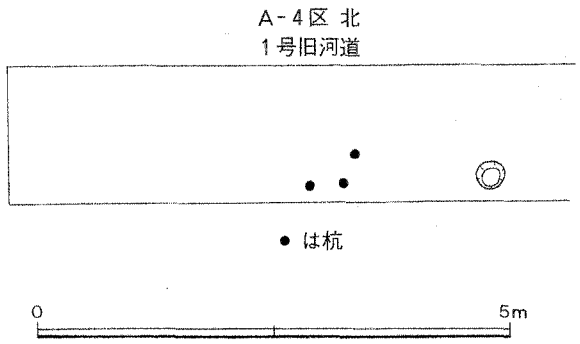
A－4区北
1　表土
2a　暗赤褐色土（よくしまっている）
2b　褐灰色粘質土
3a　黒褐色粘質土
3b　黒褐色泥炭質土（炭化物を多く含む）
4　灰色粘質土
5　黒灰色粘質土　（砂粒が混じる）
6　灰色砂層（下部は黒色の腐食土層となる）

A－3区
1　表土
2　褐灰色粘質土
3　黒褐色土
4　暗赤褐色土
5a　褐色粘質土
5b　黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
5c　灰褐色粘質土
6a　灰色土
6b　暗オリーブ灰色土　（固くしまっている）
6c　灰色砂質土
6d　灰色粘質土
7a　灰色砂質土
7b　黒褐色粘質土
7c　灰色砂層
7d　黒褐色腐食土
8　灰色オリーブ砂質土
9　灰色砂礫層



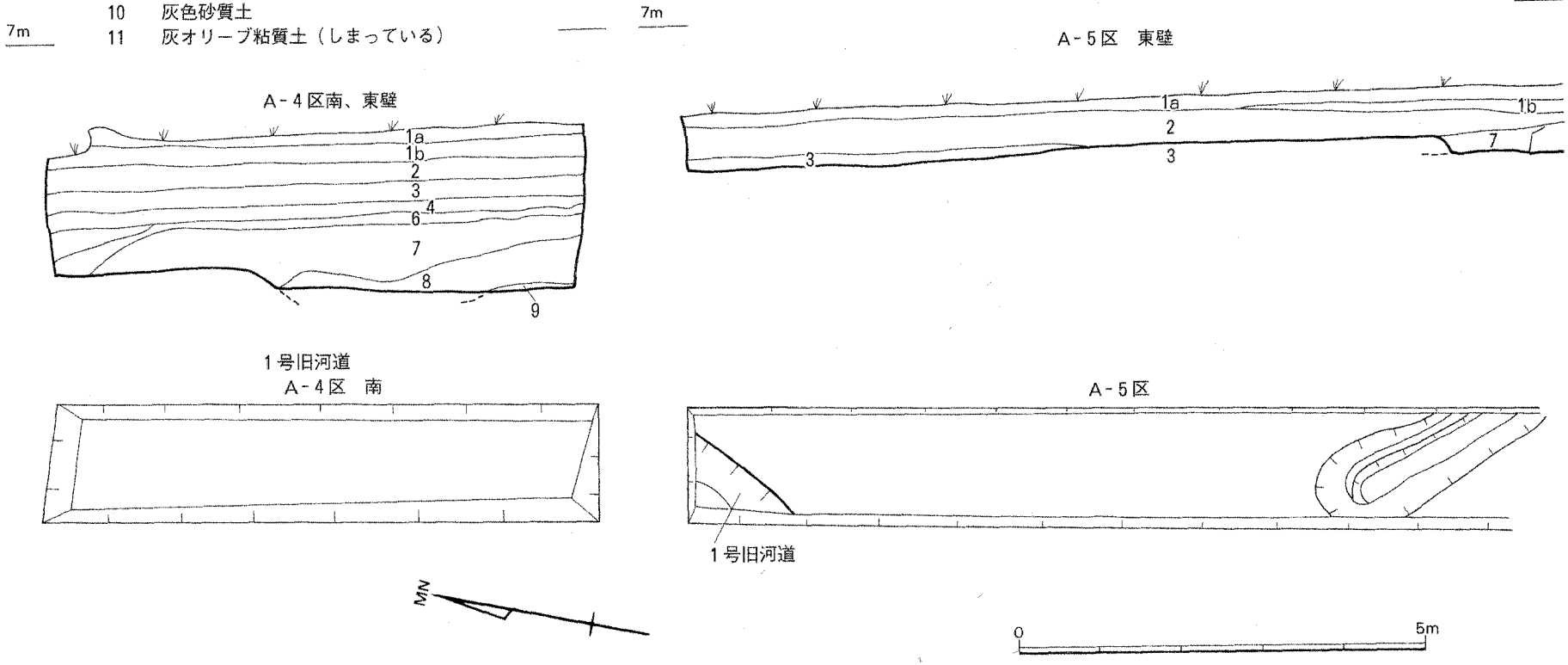






第5図　A－3区～A－4区平面図，土層図（1／80）

1 a　表土
1 b　灰黄褐色粘質土
2　暗褐色土
3　明褐色粘質土（一部にFe沈殿）
4　褐色粘質土
5　黒褐色土
6　灰褐色粘質土　（弥生土器の包含層）
7　褐灰色粘質土
8　灰色砂層
9　褐色腐食土
10　灰色砂質土
11　灰オリーブ粘質土（しまっている）



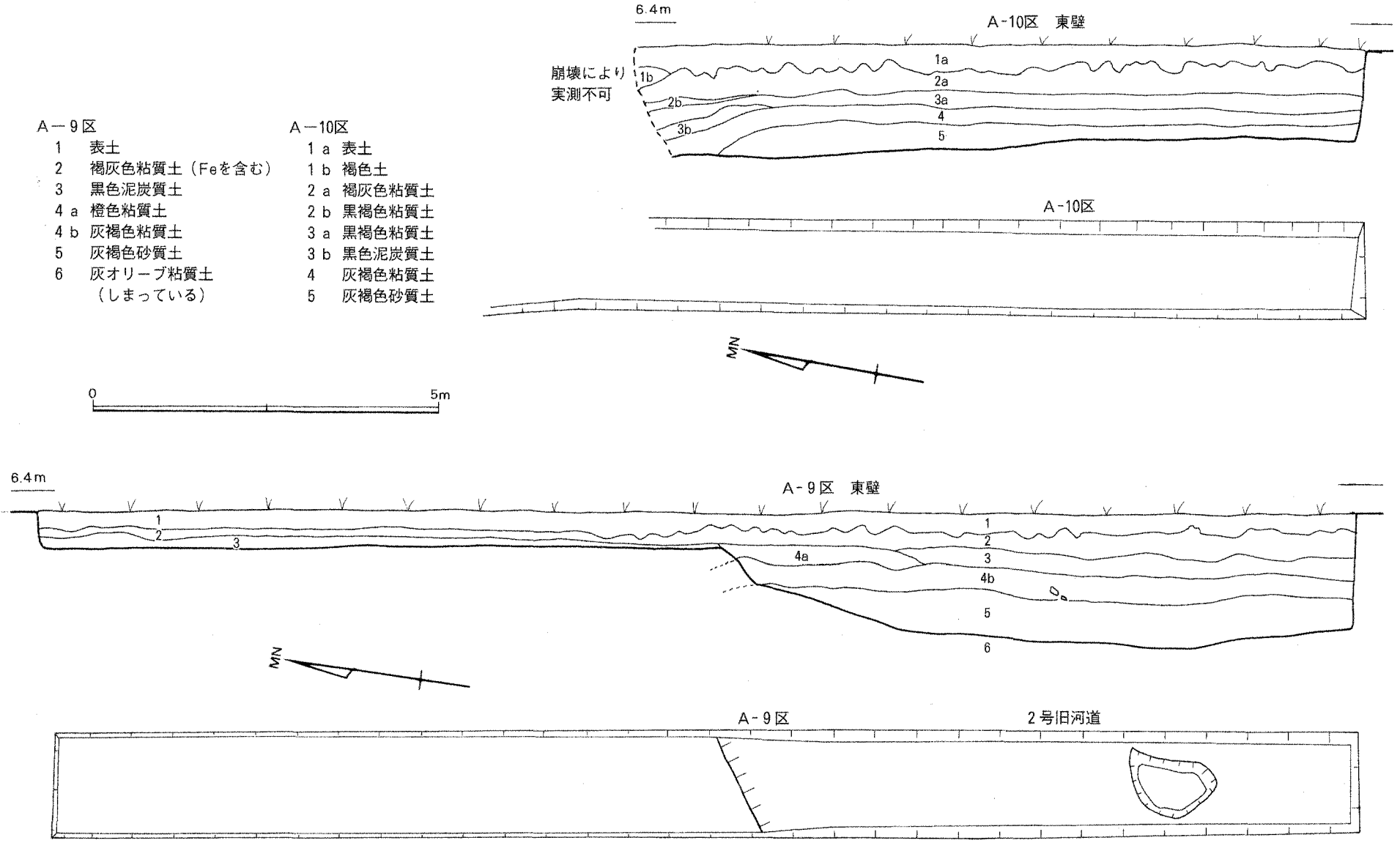
第6図　A—4区南～A—5区平面図，土層図

A－9区

1　表土
2　褐灰色粘質土（Feを含む）
3　黒色泥炭質土
4 a　橙色粘質土
4 b　灰褐色粘質土
5　灰褐色砂質土
6　灰オリーブ粘質土
　（しまっている）

A－10区

1 a　表土
1 b　褐色土
2 a　褐灰色粘質土
2 b　黒褐色粘質土
3 a　黒褐色粘質土
3 b　黒色泥炭質土
4　灰褐色粘質土
5　灰褐色砂質土



第７図　Ａ－９区～Ａ－10区平面図，土層図

(2) 遺　構

①1号旧河道（第5図，第6図，図版2）

A－3区からA－5区まで検出された遺構である。A－3区土層は9層に分かれているが，2層からは，白磁，同安窯系青磁，古代の須恵器，土師器が出土している。5層から8層上面にかけては，弥生式土器（中期）の出土が多く見られ，弥生時代の包含層と考えられる。しかし，A－4区になると，A－3区より遺物出土数が少なく，A－3区から流れ込んだと考えられる。

②2号旧河道（第7図，図版3）

A－9区からA－10区まで検出された遺構で，ただし，A－10区は，途中で崩壊している。A－9区土層は，6層に分かれている。2層から白磁が出土，3層，4層から若干の弥生土器が出土する。

③3号旧河道（第8図～第10図，図版7）

D－1区からE－5区，E－6区，E－7区に蛇行しながらつながると考えられる遺構である。まず土層であるが，D－1区からE－7区にいたる3層は，いずれも灰白色の小礫を含む黒褐色の粘質土層である。また，D－1区の溝の3層から布留式の土師器の土器が出土しているが，E－7区からも古墳時代前期の山陰系の古式土師器が，黒灰色の粘質土層（13層）から出土しているので，3号旧河道は，古墳時代前期の旧河道と考えられる。

④船着場跡，北石組遺構，南石組遺構（第11図～第14図，図版3，図版4）

船着場跡，北石組遺構，南石組遺構の軸線は，真北から西方向へ18度傾いている。まず，船着場跡だが，A－11区からB－5区，B－6区にかけて検出された遺構である。東西約30m，南北約50mの範囲で検出されており，西突堤は，上面幅約3.2m，下底幅約8.8m，高さ約1.6m。東突堤は，上面幅約3.0m，下底幅約9.0m，高さ約2.0m。長さは，約10.0m。両突堤の間隔は，上部で約12.4m，下部で約8.0m。構造としては，基礎部分に木材や石を敷き，その両端は横崩れを防ぐために杭を打ち補強してある。その上部には，樹皮を敷いた後に盛土を施し土塁状に仕上げてある。（敷粗朶工法）更に，盛土の石や樹皮を貼り付け土塁を強化している。遺構の横断面はいずれも台形状である。西突堤の東南隅はL字形に屈曲しており，東堤防の西南隅に繋がることが予想される。したがって遺構体はコの字形になると考えられる。盛土4層から弥生時代中期前半の須玖Ⅰ式古段階の土器が出土している。

次に，北石組遺構，南石組遺構だが，A－13区からA－14区にかけて検出された遺構である。北石組遺構は，上面幅約1.0m，長さ約6.0m，南石組遺構は，上面幅約1.2m，長さ約6.0mにわたって検出。北石組遺構は，南から北に傾斜しており，法面を形成している。南石組遺構は中央がくぼむ溝状の遺構で，その横断面はU字形である。北石組遺構と南石組遺構の間は，約7.0m。フラットな面をつくりだしている。石組の検出された土層の4層は，船着場跡のA－11区の4層につながっている。

⑤1号溝（第15図，第16図，図版5）

B－1区からB－2区にかけて検出された溝である。上面幅約1.6m，下面幅約1.1m，深さ約0.8m溝は，断面が台形状をなしており，調査区に弓形で約23.0mにわたり，検出された。溝からは，弥生中期後半期の土器（須玖Ⅱ式土器）や石器等の遺物が廃棄状況で出土している。

⑥9号溝(第8図)

D－1区の東側に南北に走る形で検出され，上面幅約2.6m，下面幅約1.6m，深さ約0.6m。溝からは，弥生時代中期から後期の土器が出土した。また，弥生時代後期のものと思われる銅鏃も出土した。

⑦12号溝（第17図）

D－2区の西側を南北に走る形で検出された溝。上面幅約1.7m，下面幅0.5m，深さ約0.4m。

⑧13号溝・14号溝・15号溝（第9図，図版⑯～⑱）

D－3区の中を，南北に3条の溝が平行して走る形で検出された。13号溝の上面幅約1.6m，下面幅0.5m，深さ0.5m。14号溝の上面幅約1.4m，下面幅約0.6m，深さ0.3m。15号溝の上面幅1.6m，下面幅1.2m，深さ0.3m。13号溝と14号溝からは須玖Ⅰ式，須玖Ⅱ式土器が出土しており，弥生時代中期の溝と考えられる。15号溝は，E－1区の16号溝につながる。

⑨16号溝・17号溝・18号溝（第19図）

E－1区からE－2区を，南北に3条の溝が平行して走る形で検出された。16号溝の上面幅約1.6m，下面幅0.6m，深さ0.4m。17号溝は，上面幅3.3m，下面幅1.2m，深さ0.8m。18号溝は，上面幅2.4m，下面幅0.5m，深さ0.6m。18号溝からは土師器の高坏が出土している。17号溝，18号溝は，それぞれD－4区の23号溝，24号溝とつながる。

⑩19号溝・20号溝（第20図）

E－3区の中を，東西に2条の溝が並行して走る形で検出された。19号溝の上面幅約2.4m，下面幅1.0m，深さ0.2m。20号溝は，上面幅3.4m，下面幅0.6m，深さ0.6m。どちらの溝からも須玖Ⅱ式土器が出土する。

⑪21号溝・22号溝（第9図）

E－6区の中を，東西に2条の溝が並行して走る形で検出された。21号溝の上面幅約4.8m，下面2.0m，深さ0.8m。22号溝は，上面幅4.1m，下面幅0.4m，深さ1.0m。

⑫水田畦畔遺構（第21図，第22図，図版8）

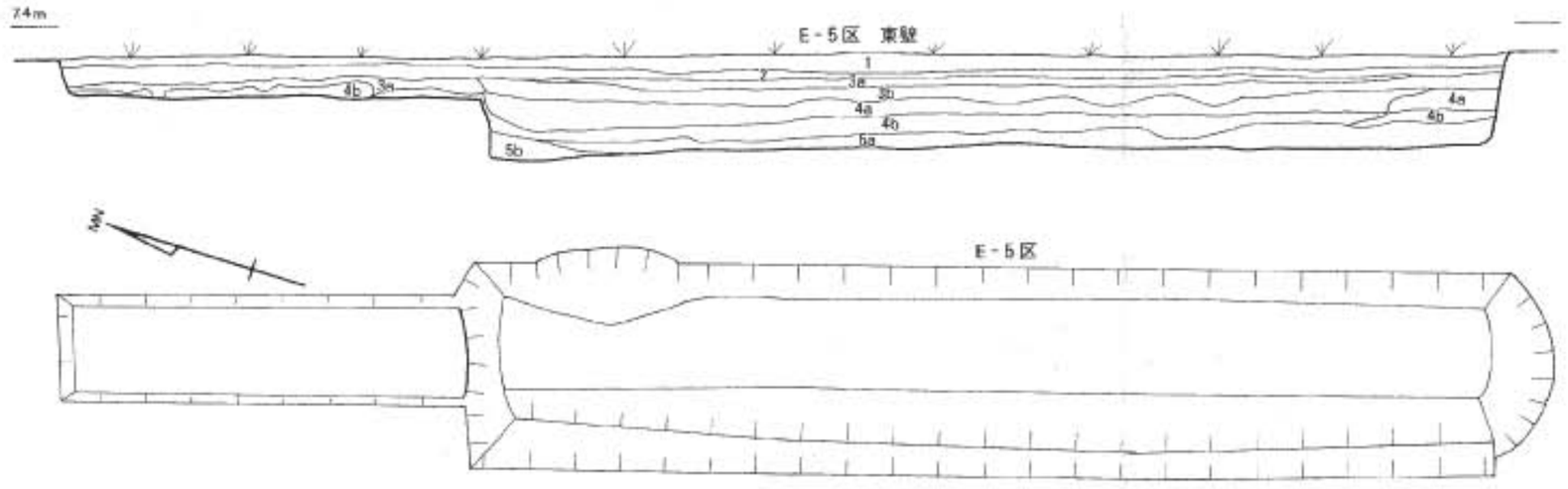
A－17区からA－18区にかけて検出された遺構である。幅約0.6m，高さ約0.2m，検出された長さは，約4.0mである。畦は，盛土で形成され，北東から南西方面へと伸びている。盛土内には，木材を埋め込み，畦の南側は矢板で補強してある。遺構の西端から，弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土している。

⑬1号濠(第23図，図版10)

A－24区を北東から南西にかけて走る形で検出され，上面幅約7.0m，下面幅3.2m，深さ2.0m。

⑭2号濠（第17図，図版9）

D－2区を北西から南東にかけて走る形で検出された。上面幅約3.6m，下面幅0.4m，深さ1.6mであり，断面がV字形の濠である。ただし，南壁面において濠は終了している。



D－1区東壁土層

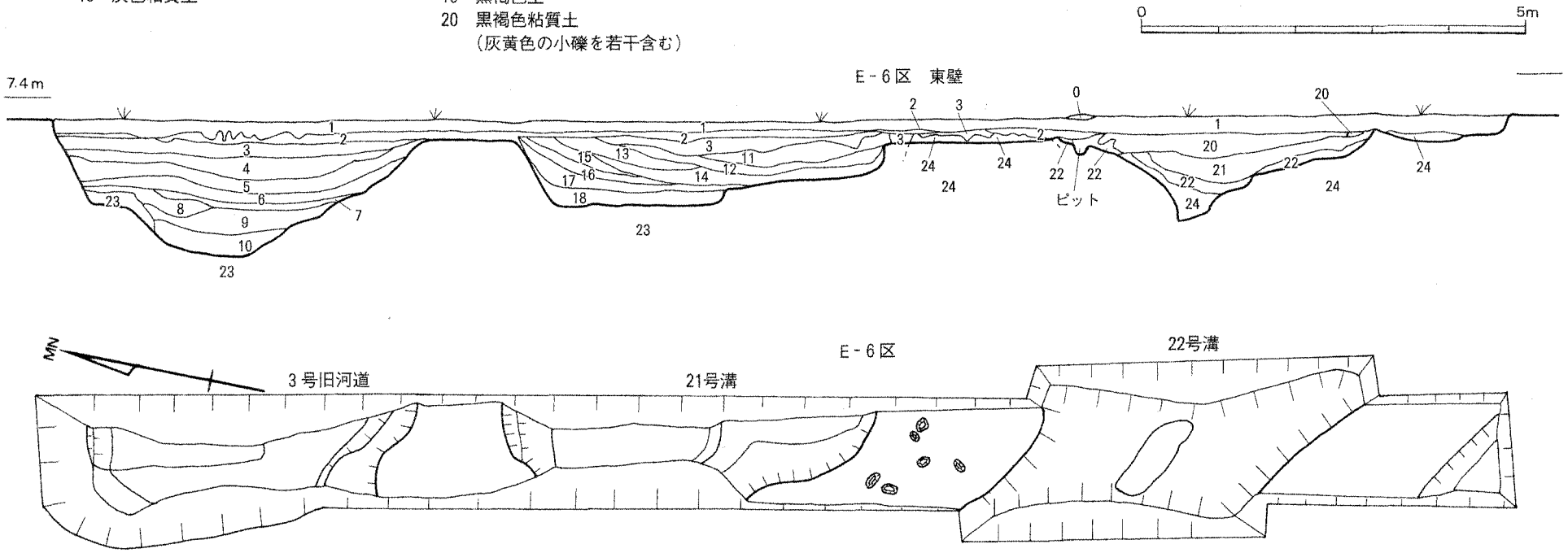
1 a 表土
1 b 表土（床土）
2　褐灰色粘質土層
3 a 黒褐色粘質土層（灰白色の砂礫を含む）
3 a' 黒褐色粘質土（灰黄褐色の粘質土を含むブロックの形）
3 b 黒褐色腐食土層
3 d 黒褐色砂質土層
3 e 黒褐色粘質土層
3 f 黒色粘質土層
3 g 黒色粘質土層（砂礫を多く含む）
4 a 黄灰色粘質土層
4 b 灰色粘質土層
5　にぶい黄褐色粘質土層

E－5区東壁土層

1　にぶい黄橙色土層
2　褐灰色粘質土層
3 a 黒褐色粘質土層
3 b 黒色粘質土層
（灰白色の砂礫を多く含む）
4 a 黒褐色粘質土層
4 a' 灰色粘質土層
4 b オリーブ黒色粘質土層
4 b' 暗緑灰色粘質土層（小さな礫を多く含む）
5 a 青灰色地山
5 b 灰色砂礫層

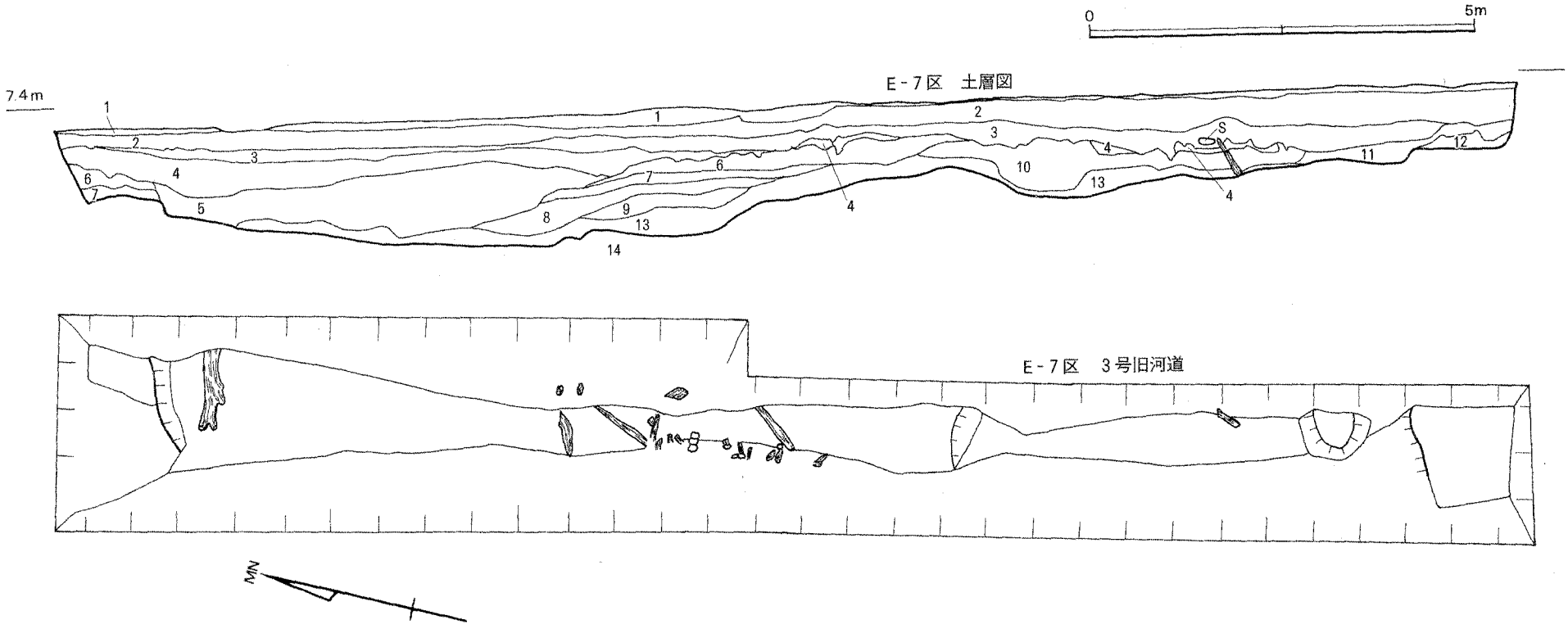
第8図　3号旧河道，9号溝平面図，土層図（1／80）

0　盛土
1　にぶい黄橙色土
2　褐灰色粘質土
3　黒褐色粘質土 ｝（灰白色小礫を多く含む）
4　黒色粘質土 ｝
5　黒褐色粘質土
6　灰色粘質土
7　オリーブ黒色粘質土
8　暗緑灰色粘質土（小礫を多く含む）
9　黄灰色粘質土
10　灰色粘質土
11　褐灰色粘質土
（灰白色の小礫を多く含む）
12　黒褐色粘質土
13　灰褐色土
（地山の土や灰白色小礫を多く含む）
14　灰色粘質土
15　黄灰色粘質土
16　灰色粘質土（砂を多く含む）
17　灰色粘質土
18　灰色粘質土（ややしまっている）
19　黒褐色土
20　黒褐色粘質土
（灰黄色の小礫を若干含む）
21　黒色粘質土
22　灰色粘質土
23　青灰色地山
24　オリーブ黒色地山

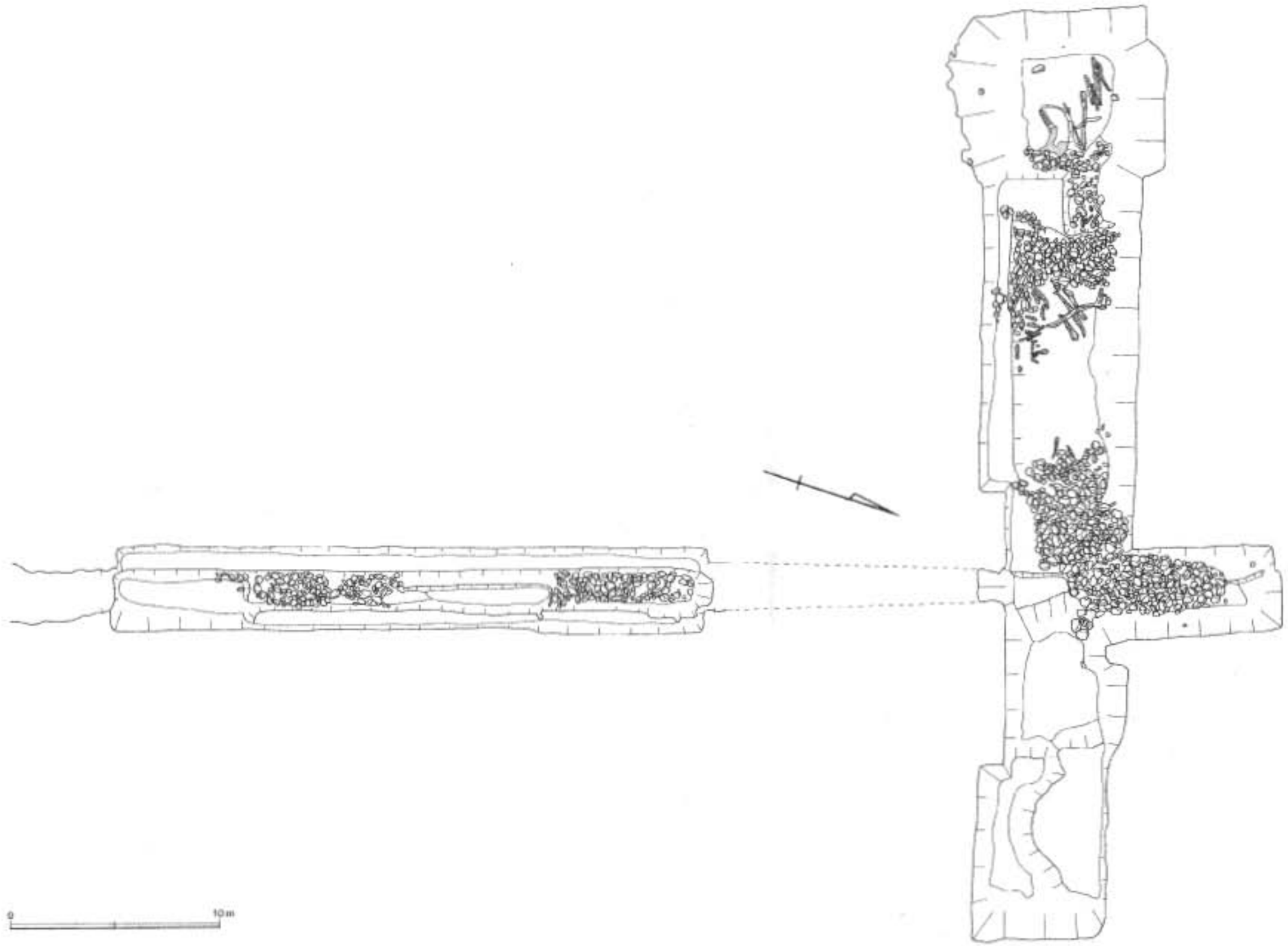


第9図　E－6区平面図，土層図（1／80）

1　にぶい黄橙色土
2　灰褐色粘質土
3　黒褐色粘質土
　（灰白色の砂礫を多く含む）
4　黒色粘質土
5　黒褐色粘質土
6　褐灰色粘質土
7　暗灰黄色粘質土
8　オリーブ黒色粘質土
　（砂質土を多く含む）
9　黒褐色粘質土
　（小礫を多く含む）
10　灰色粘質土
11　黒褐色粘質土
　（灰色粘質土のブロックが混じる）
12　灰色粘質土
13　黒灰色粘質土
　（砂礫を多く含む）
14　明褐色砂礫層
15　暗灰黄色土
　（砂礫が混じる）

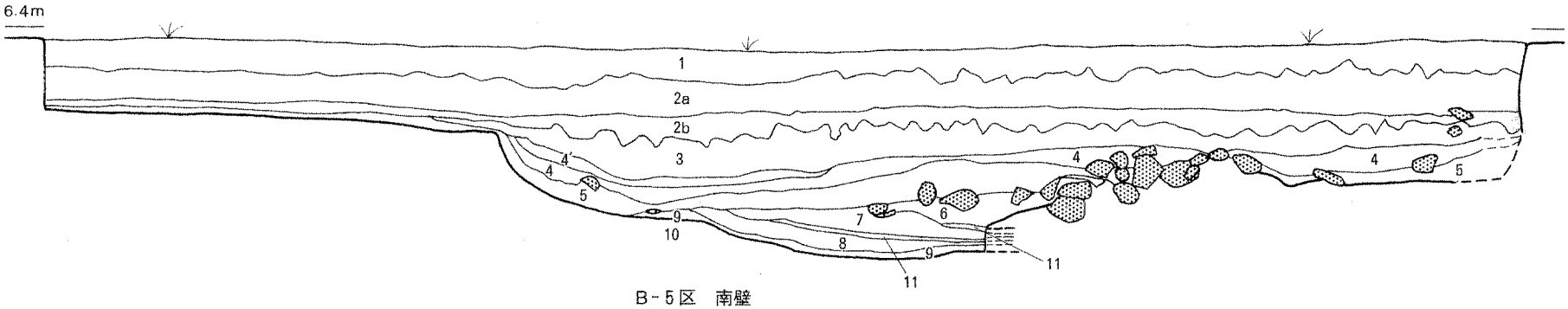


第10図　E－7区平面図，土層図



第11図　船着場跡，北・南石組遺構（1／200）

第12図　給湯場跡，平面・断面実測図（1／60）



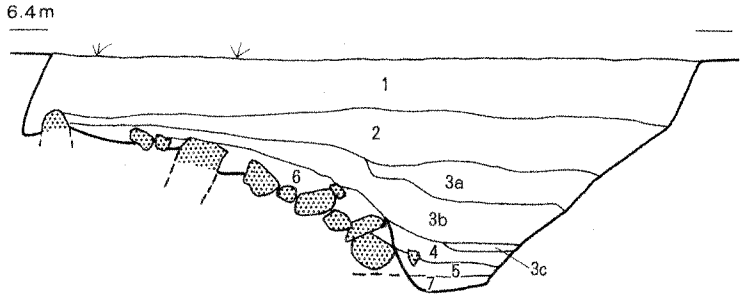
B-5区　南壁

B－5区　南壁土層

1	表土	
2 a	灰褐色粘質土	
2 b	褐灰色粘質土	
3	黒色泥炭質土	
4	灰褐色粘質土	船着場跡盛土
4′	暗灰褐色粘質土	船着場跡盛土
5	暗オリーブ灰色粘質土	船着場跡盛土
6	褐灰色粘質土	船着場跡盛土
7	にぶい黄橙色粘質土	船着場跡盛土
8	黄灰色粘質土	船着場跡盛土
9	灰色砂質土	
10	明黄褐色土	
11	腐食土層	

A－11区　西壁土層

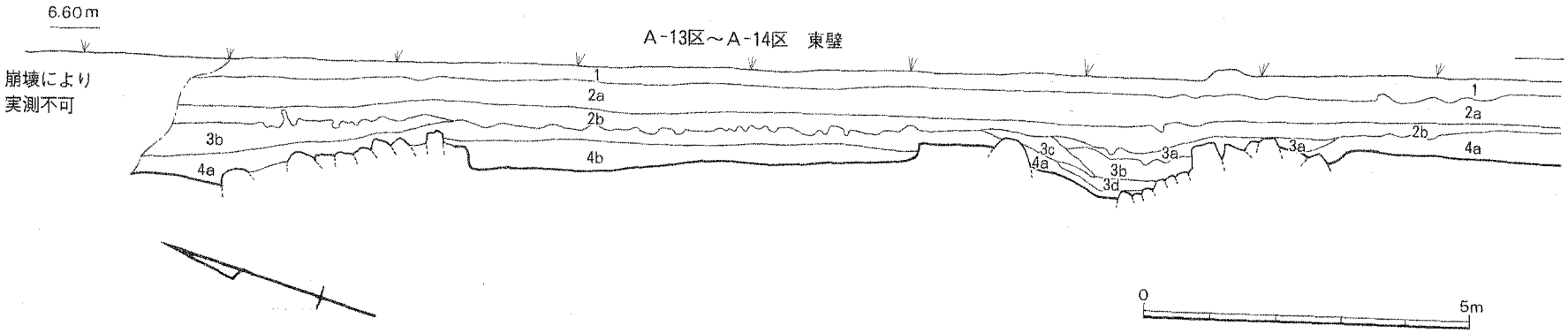
1	表土
2	褐灰色粘質土
3 a	黒褐色粘質土
3 b	黒色泥炭質土
3 c	暗灰黄色粘質土
4	黒褐色粘質土
5	黄灰色粘質土
6	暗オリーブ灰色粘質土
7	オリーブ灰色砂礫層

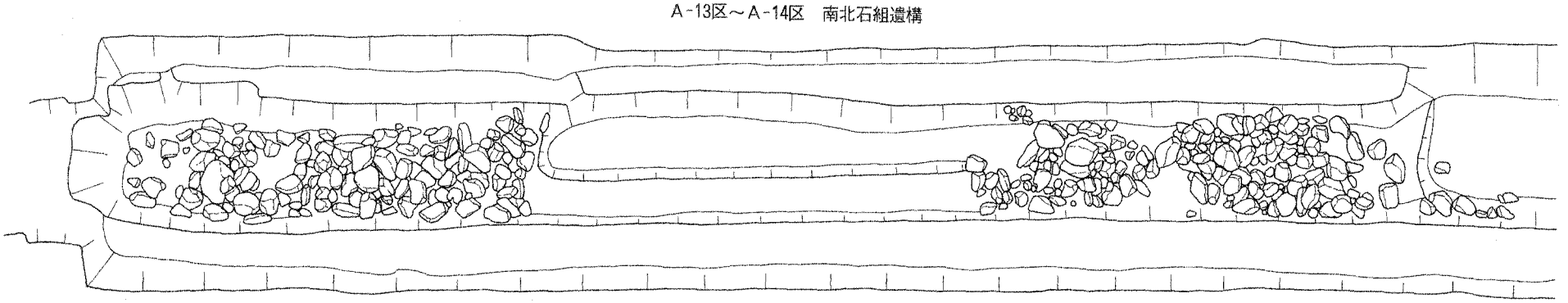


A-11区　西壁

第13図　船着場跡土層（1／80）

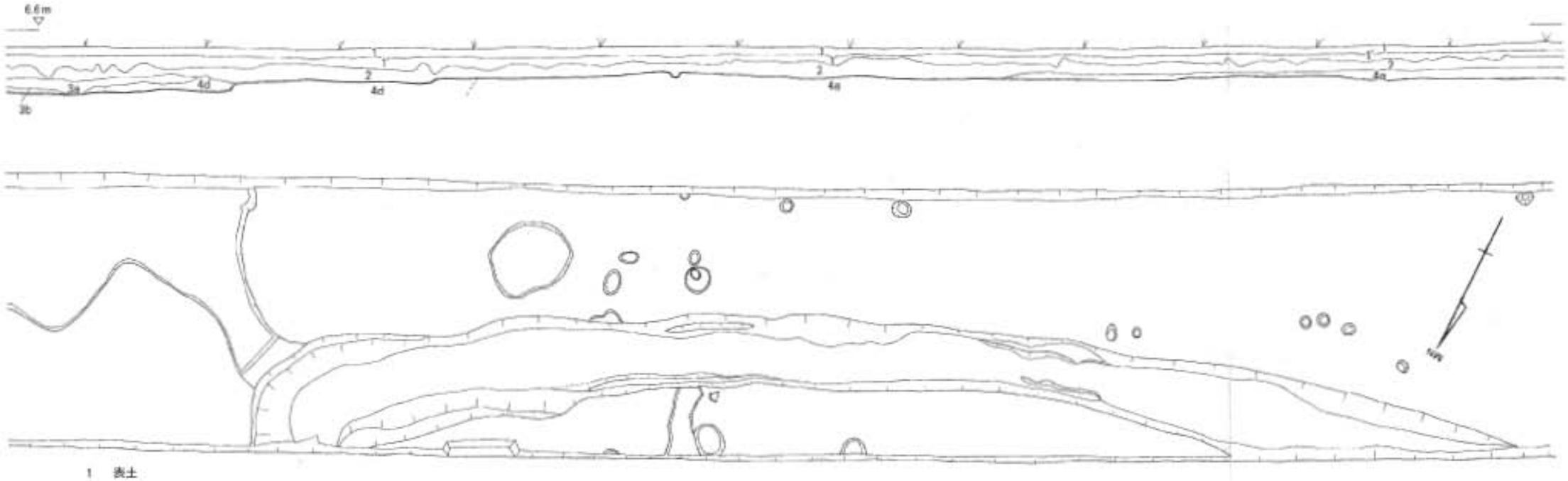
1　表土
2 a　灰褐色粘質土
2 b　褐灰色粘質土
3 a　黒灰色粘質土
3 b　黒色泥炭質土
3 c　黒色粘質土
3 d　黒褐色泥炭質土
4 a　灰褐色粘質土
4 b　暗灰黄色粘質土





第14図　北石組・南石組遺構（1／80）

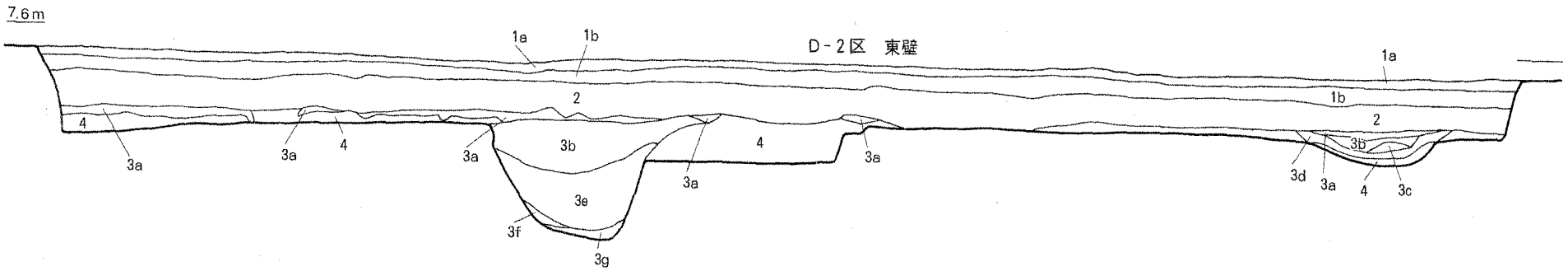
第15図　B－1区～B－2区　1号溝検出状況実測図（1／40）

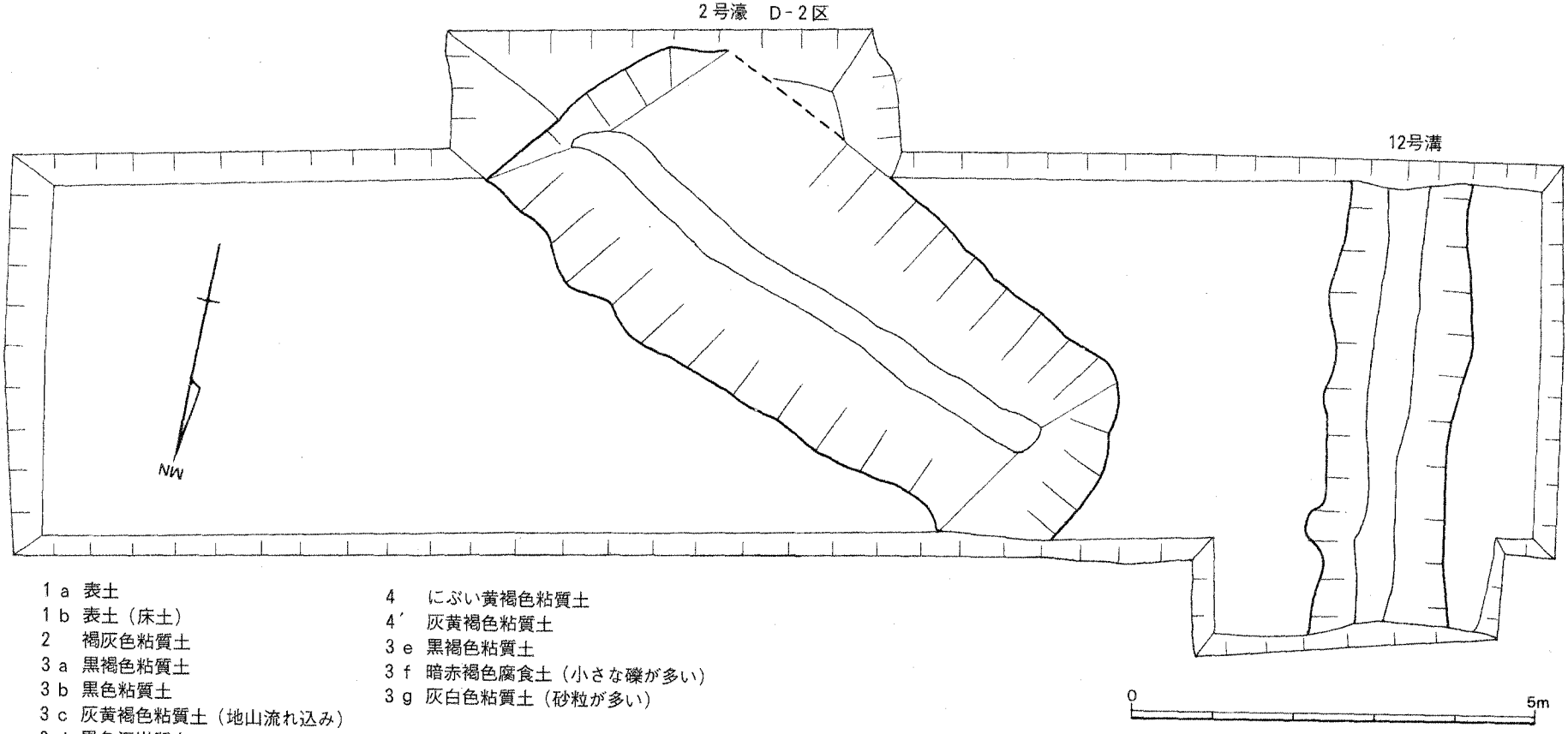


1　表土
1'　表土
2　褐灰色粘質土
3 a　黒褐色粘質土
3 b　黒色泥炭質土
4 a　黒褐色粘質土
4 b　黒褐色粘質土
4 c　灰色粘質土
4 d　にぶい褐色粘質土
5　灰色粘質土

0　5m

第16図　B－1区～B－2区　1号溝平面図，土層図（1／80）

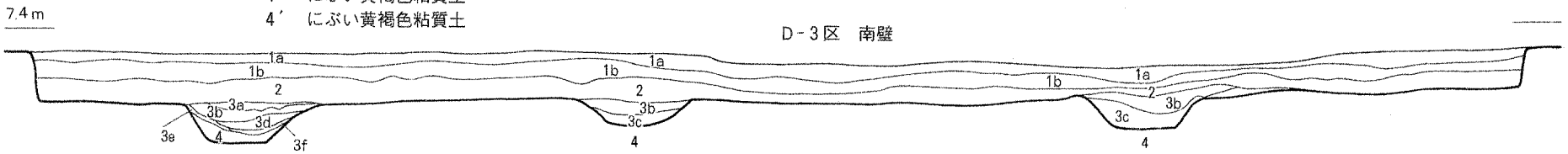


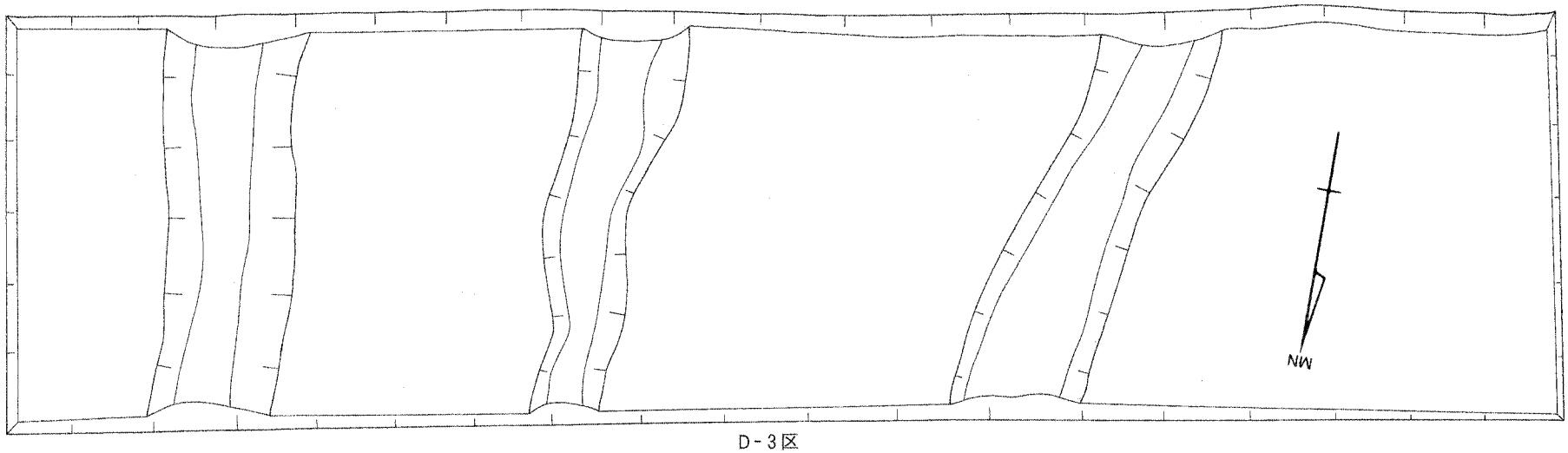


1 a　表土
1 b　表土（床土）
2　　褐灰色粘質土
3 a　黒褐色粘質土
3 b　黒色粘質土
3 c　灰黄褐色粘質土（地山流れ込み）
3 d　黒色泥炭質土
4　　にぶい黄褐色粘質土
4′　灰黄褐色粘質土
3 e　黒褐色粘質土
3 f　暗赤褐色腐食土（小さな礫が多い）
3 g　灰白色粘質土（砂粒が多い）

第17図　D―2区平面図，土層図（1／80）

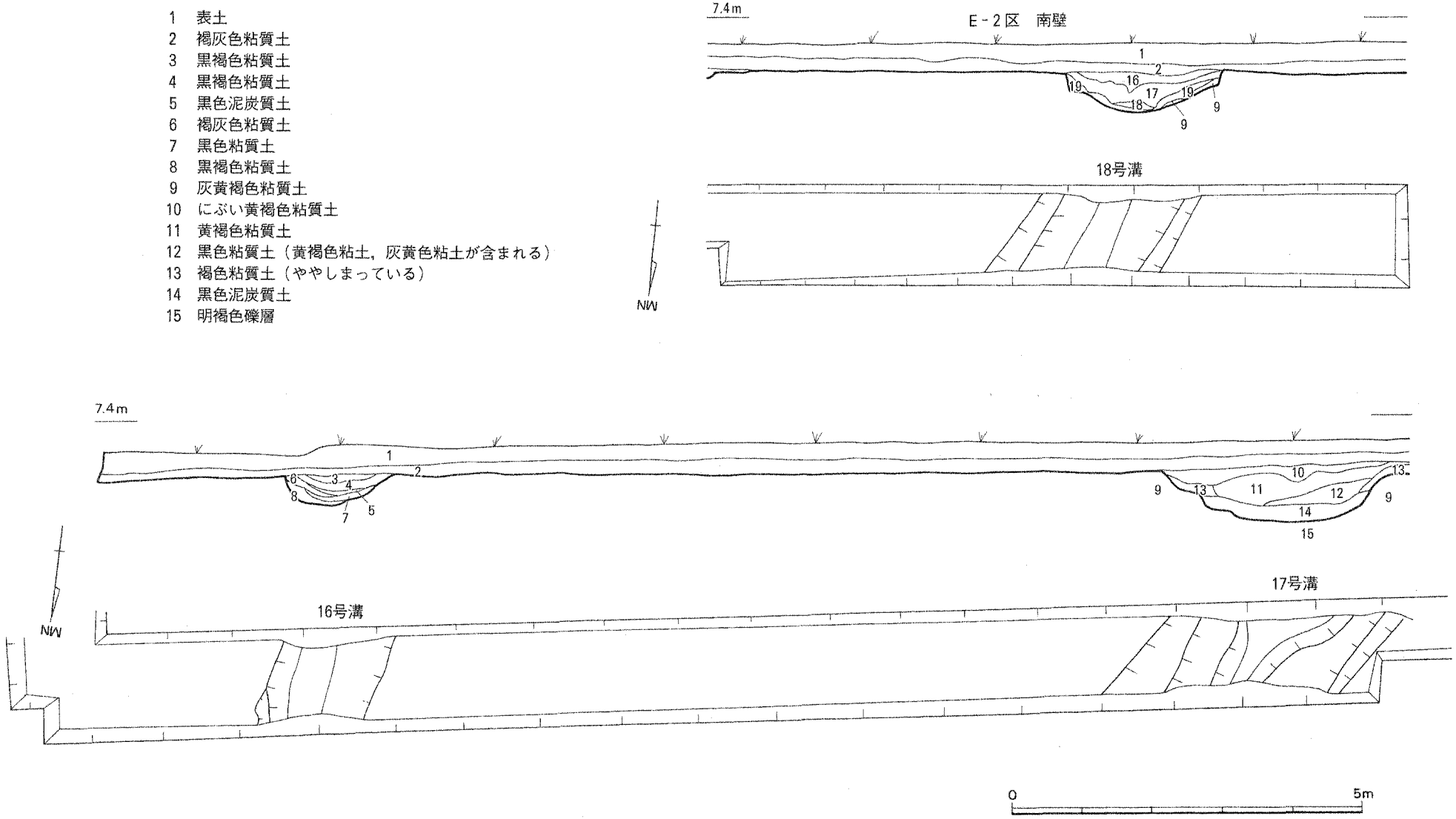
1 a　表土
1 b　表土
2　　褐灰色粘質土
3 a　褐灰色粘質土
3 b　黒褐色粘質土
3 c　黒色粘質土
3 d　灰黄褐色粘質土（地山の流れ込み）
3 e　暗褐色粘質土
3 f　黒褐色粘質土
4　　にぶい黄褐色粘質土
4′　にぶい黄褐色粘質土





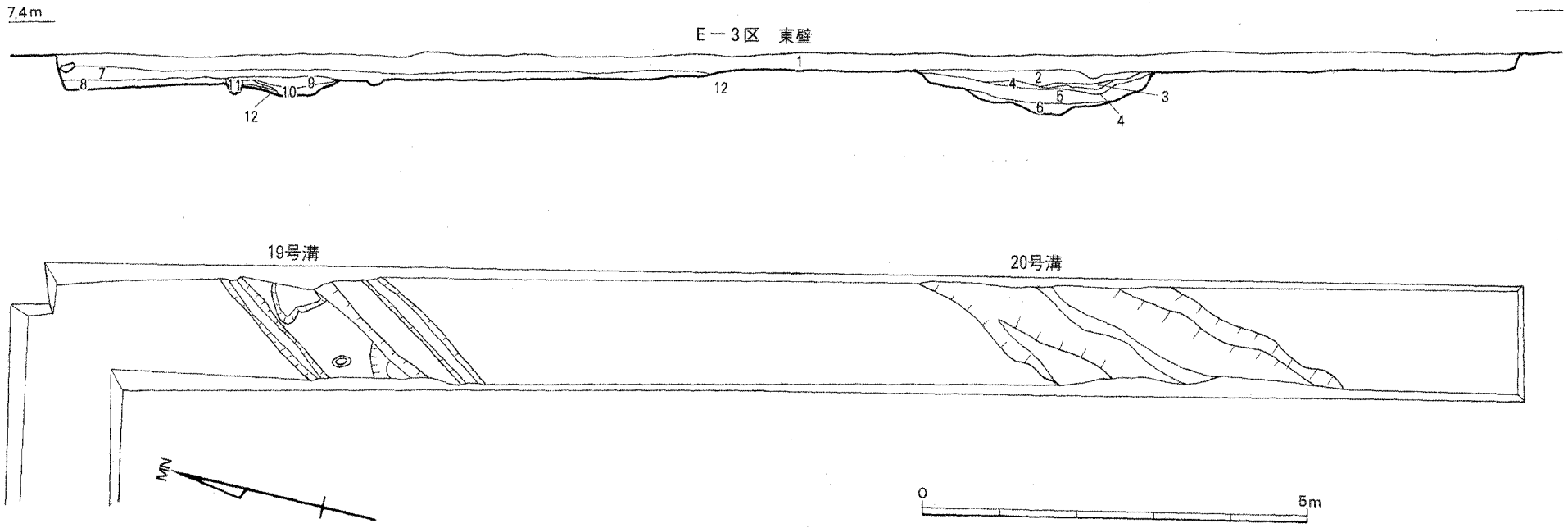
第18図　D－3区平面図，土層図（1／80）

1　表土
2　褐灰色粘質土
3　黒褐色粘質土
4　黒褐色粘質土
5　黒色泥炭質土
6　褐灰色粘質土
7　黒色粘質土
8　黒褐色粘質土
9　灰黄褐色粘質土
10　にぶい黄褐色粘質土
11　黄褐色粘質土
12　黒色粘質土（黄褐色粘土，灰黄色粘土が含まれる）
13　褐色粘質土（ややしまっている）
14　黒色泥炭質土
15　明褐色礫層



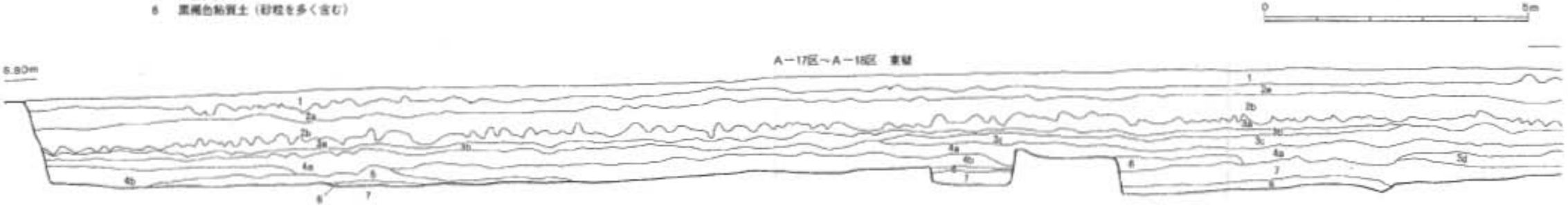
第19図　E－1区～E－2区平面図，土層図（1／80）

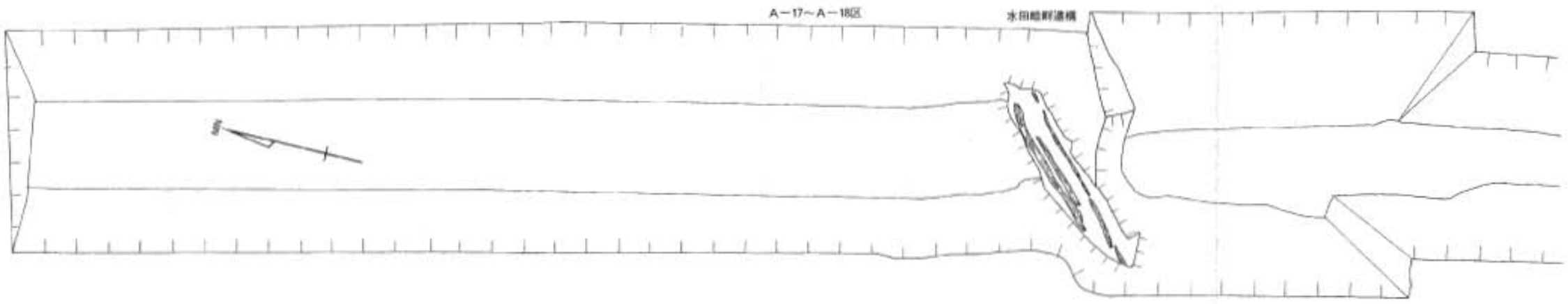
1 にぶい黄橙色土（道路の盛土）
2 灰褐色粘質土
3 黒褐色粘質土
4 黒褐色粘質土　（20号溝覆土）地山の土が混入している
5 黒色泥炭質土
6 黒褐色粘質土　5層と地山の土が混じっている
7 褐灰色粘質土
8 暗褐灰色粘質土
9 黒色泥炭質土
10 黒褐色粘質土　（19号溝の覆土）
11 灰褐色粘質土（覆土）
12 灰黄褐色粘質土（地山）



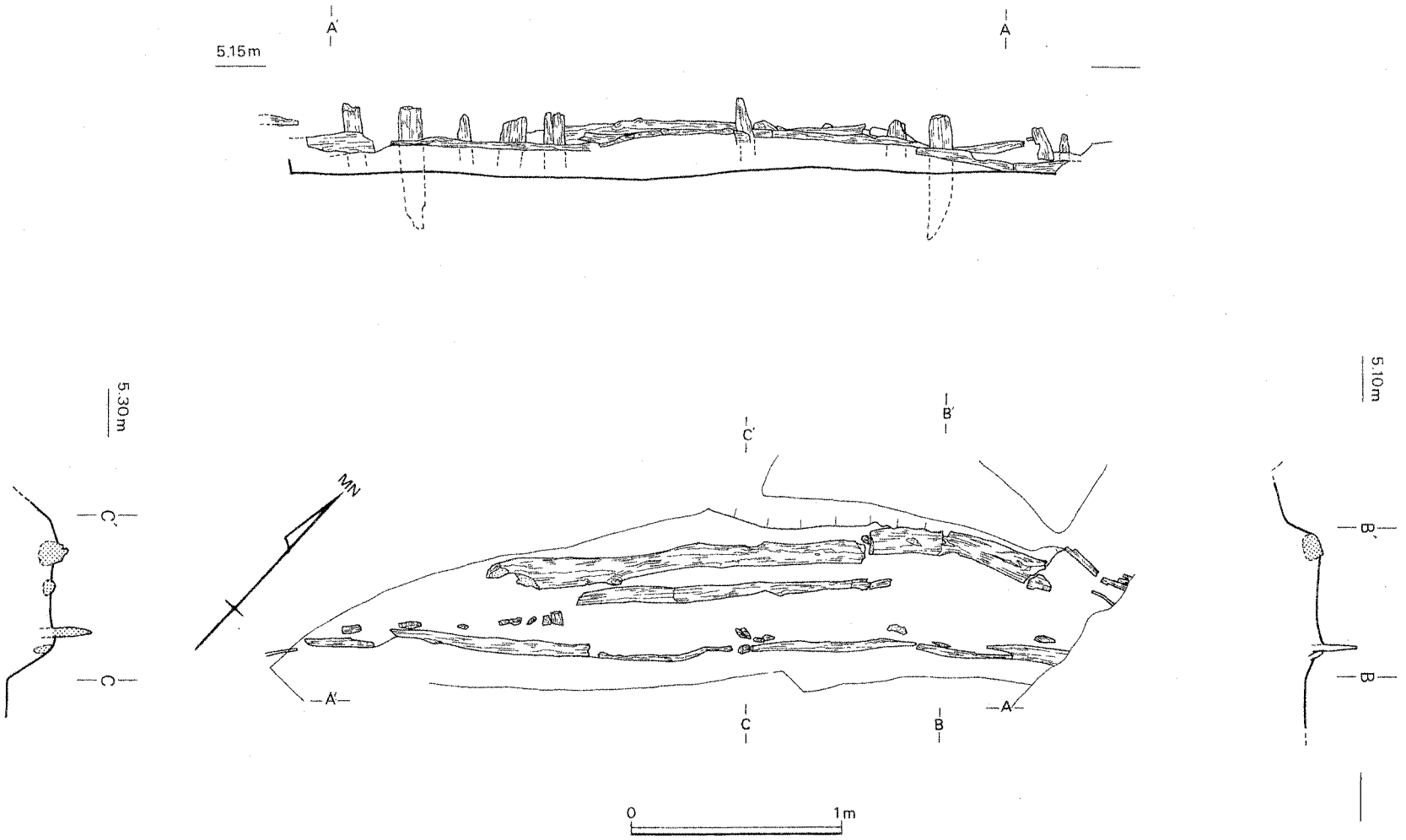
第20図　E－3区平面図，土層図（1／80）

1　表土
2 a　褐灰色粘質土
2 b　褐灰色粘質土
3 a　灰色粘質土
3 b　暗灰色粘質土
3 c　黒灰色粘質土
3 d　褐灰色粘質土
4 a　青灰色粘質土
5　灰色粘質土
6　黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
6　黒色腐食土
6　黒褐色粘質土（砂粒を多く含む）

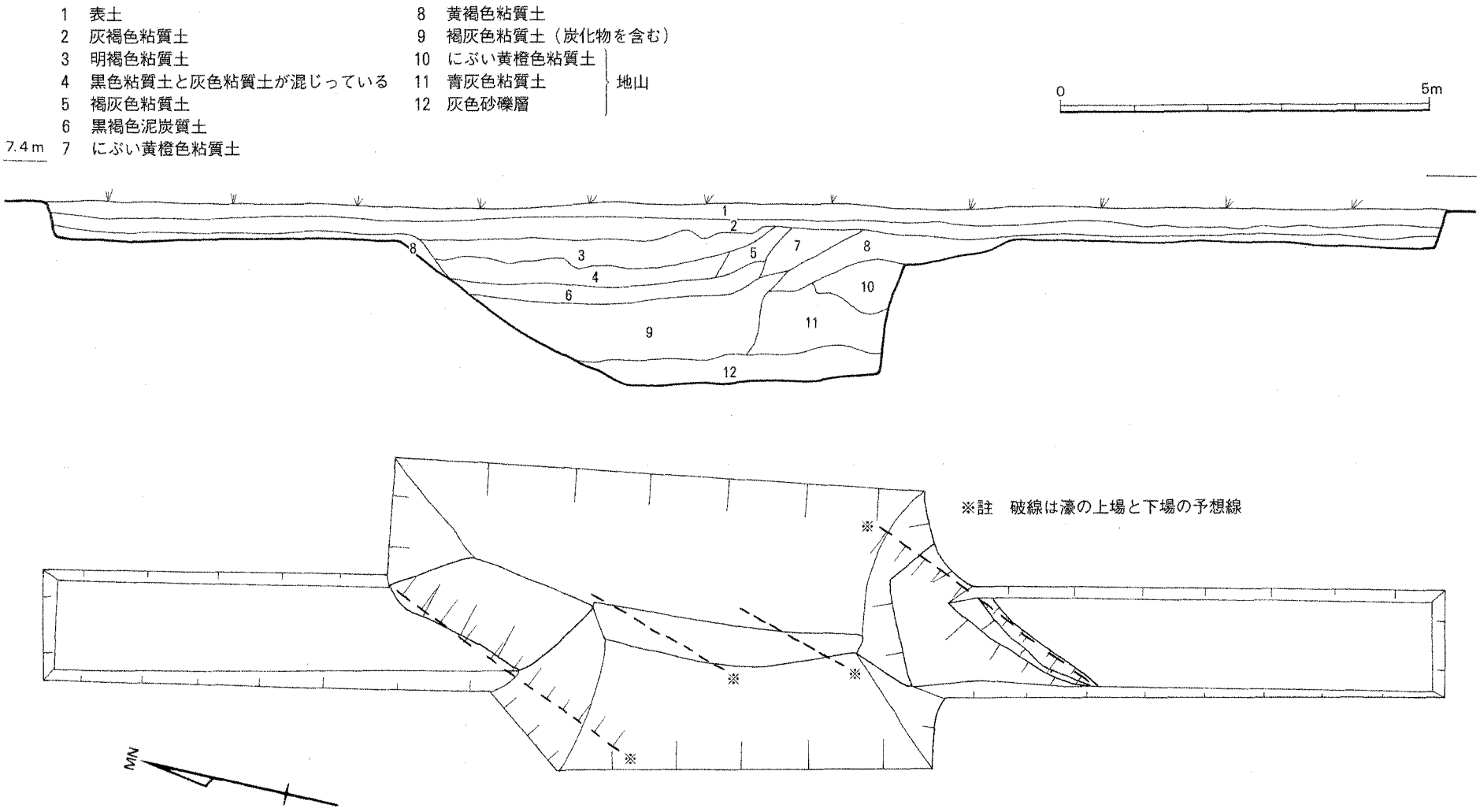




第21図　A－17区～A－18区　水田畦畔遺構平面図，土層図（1／80）



第22図　A17～18区　水田畦畔遺構実測図（1／30）



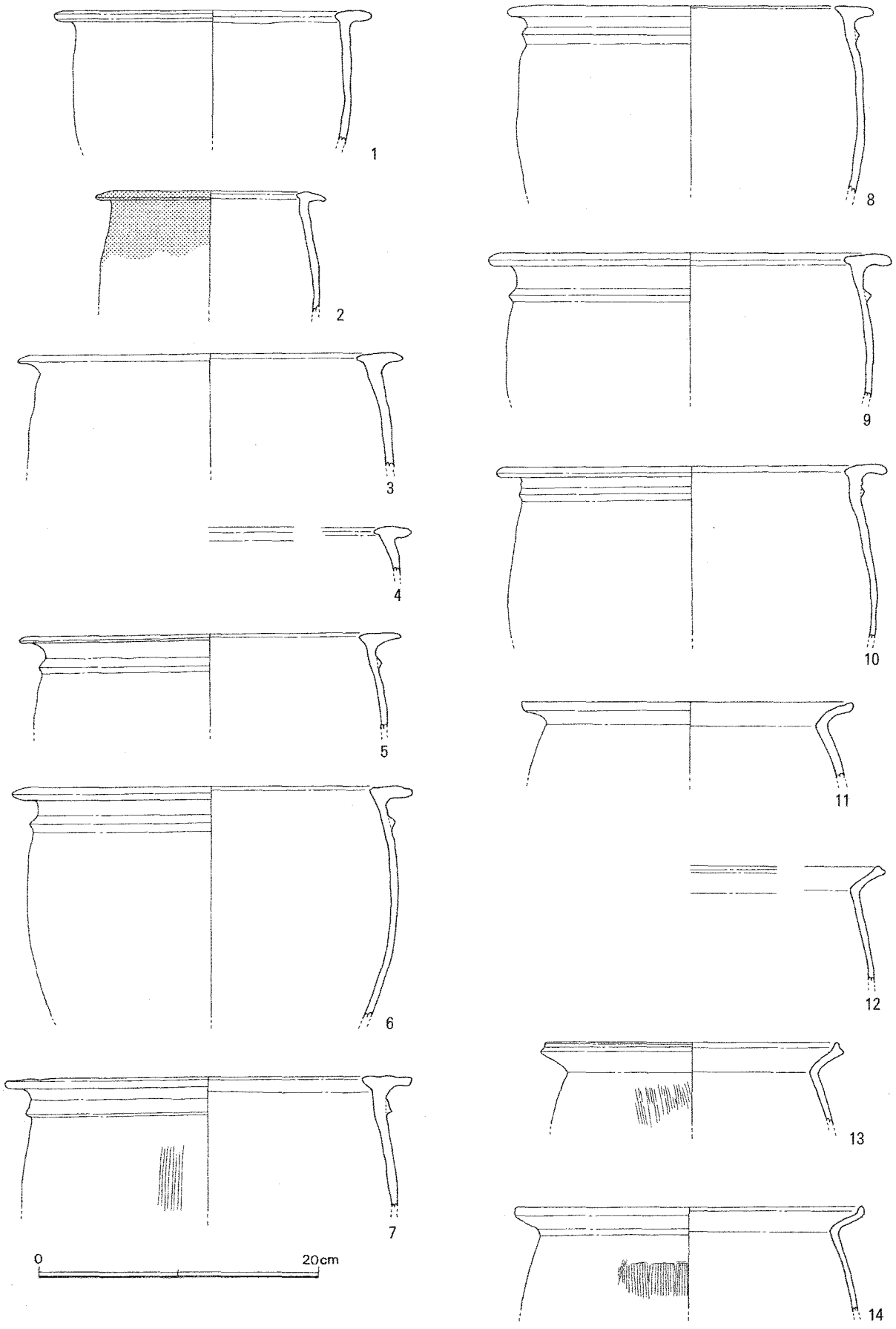
第23図 A—24区 1号濠平面図，土層図（1／80）

(3) 遺　物

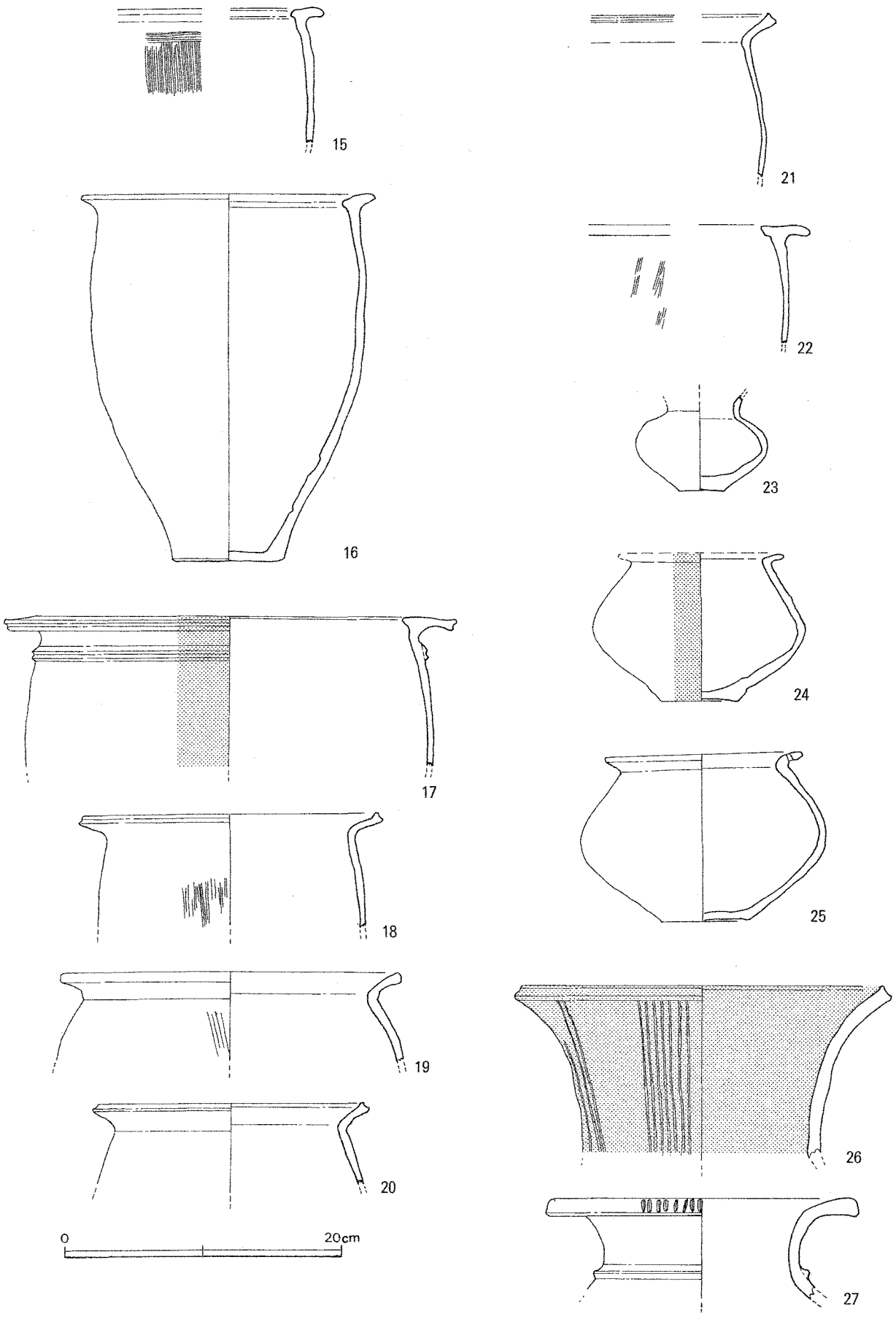
今回の調査により，遺物は，土器片26,495点，陶器片44点，石器402点，木器80点，金属器16点等が出土した。今回は，紙面の都合上，１号溝からの出土遺物，船着場跡からの出土遺物，水田畦畔遺構出土遺物を掲載することとする。

①１号溝出土遺構（第24図～第26図，28図）

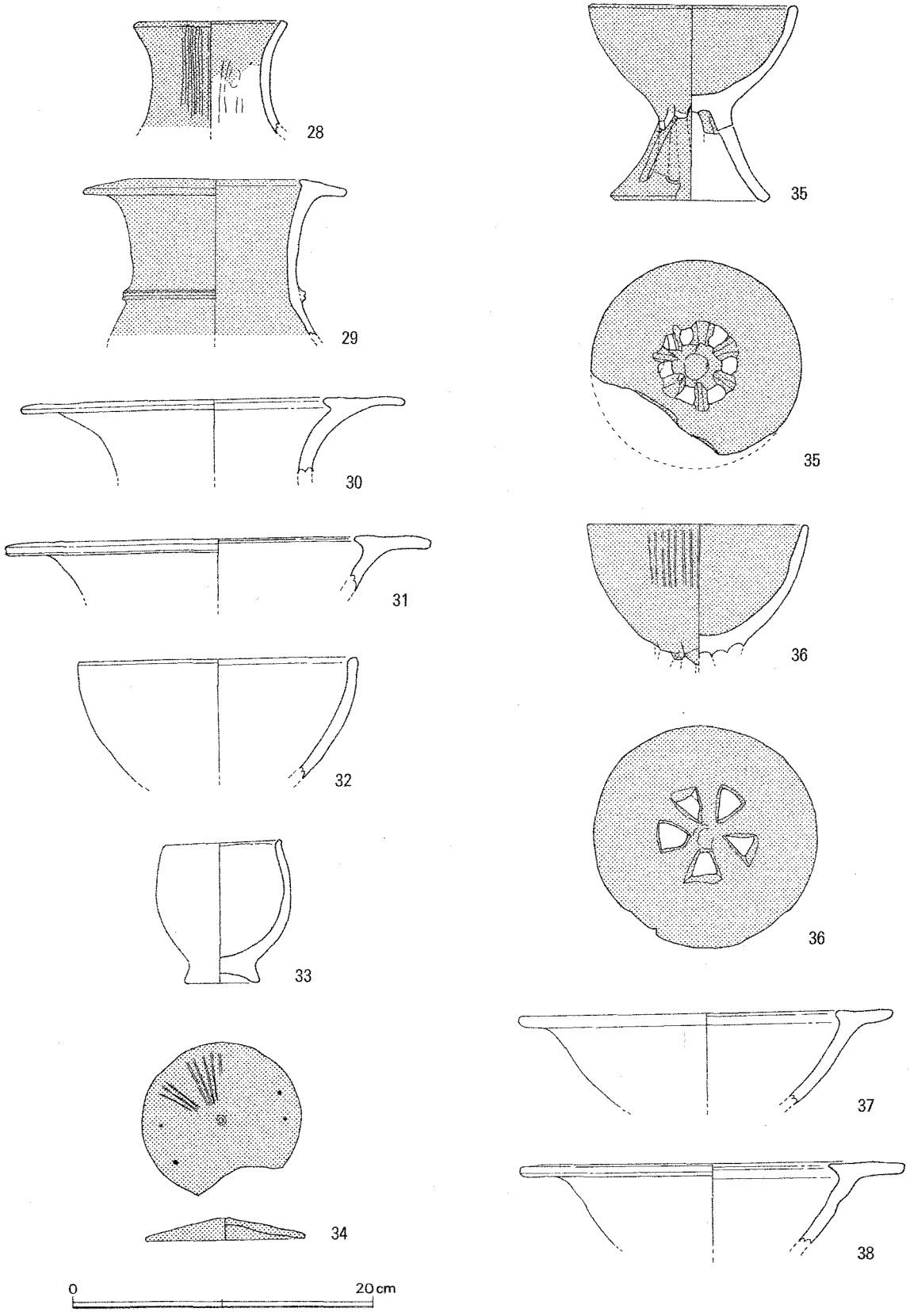
１～22は，弥生時代中期から後期初頭の甕である。そのうち，１から４，15，16，22は突帯部を持たない鋤先状口縁部を持つ土器である。５から10は，突帯部を持つ鋤先状口縁部を持つ土器である。11・19は，屈曲口縁部を持つ土器である。12から14，17・18・20・21は，はねあがり口縁部を持つ土器である。１は，内側と口縁部がやや風化しており，外側は焼痕がみられる。胎土はにぶい橙色，石英粒が混入している。２は，丹塗が施されている。胎土は橙色，石英粒がわずかに混入している。３は，胎土は橙色，石英・長石を含んでおり風化している。４は，胎土の色は灰色である。口縁部の一部が，風化，気泡が多くできている。５は，胎土はにぶい橙色，石英，長石を含む。内面は横ナデである。口縁部の下側に三角の突帯を１条めぐらす。６は，胎土はにぶい黄橙色，きめ細かいつくりである。内側は横ナデがしてあり，胴体部外側には縦方向のハケ目がみられる。口縁部の下側に三角の突帯を１条めぐらす。７は，胎土は褐灰色，石英，長石を含む。鉄分が付着している。内側は，横ナデである。口縁部の下側に三角の突帯を１条めぐらす。８は，胎土はにぶい橙色，石英，長石を含む。鉄分が付着している。内側は，横ナデである。口縁部の下側に三角の突帯を１条めぐらす。９は，胎土は灰白色であり，長石と石英の粒が混入している。口縁部の下側に三角の突帯を１条めぐらす。10は，外側は風化しているが，灰黄褐色の胎土に石英，長石，金雲母が含まれている。口縁部の下側に三角の突帯を１条めぐらす。11は，胎土は灰黄色，石英粒，長石を含む。屈曲口縁である。弥生時代後期初頭の可能性もある。12は，胎土はきめ細かく，薄い黄橙色。風化しているが，縦方向のハケ目がみられる。13は，胎土はにぶい黄橙色，鉄分が付着している。14は，胎土は薄い黄橙色。きめ細かい胎土である。外側には，縦方向のハケ目がみられる。15は，胎土は薄い黄橙色。内側に横ナデがみられるけれども，風化しており様子がよく分からない。外側は，縦方向のハケ目がみられる。16は，胎土は灰黄色，石英と長石を含む。17は，外側に丹が塗ってあり，みがきがかかっている。全体的に横ナデで仕上げてある。18は，胎土はにぶい黄橙色，石英粒と長石を含んでいる。19は，弥生時代後期初頭の屈曲口縁である。胎土の色は灰白色。石英粒や長石が含まれている。20は，胎土は，にぶい橙色。細かい長石や石英を含む。内側には，横方向にハケ目がみられる。21は，胎土は薄い橙色。外側は，縦方向にハケ目がみられる。全体的に焼痕が残る。22は，胎土は灰黄色，長石や石英，金雲母を含んでいる。23～31は，弥生時代中期の壷である。23は，小壷。胎土は灰白色，長石や石英粒を多く含んでいる。内側には，指で押さえた跡がみられる。24は，丹塗無頸壷。胎土はにぶい黄橙色，石英や長石を含む。25は，胎土は灰白色をしており，長石や石英を含んでいる。胎土表面をきれいになでてある。口縁部は欠損していたり風化しているが，直径３㎜ほどの孔が４カ所あいている。26は，口径が26cmほどある丹塗広口壷の口頸部である。胎土は橙色，内側は風化している。石英や長石が含



第24図　1号溝（B－1区～B－2区）出土土器①（1／4）



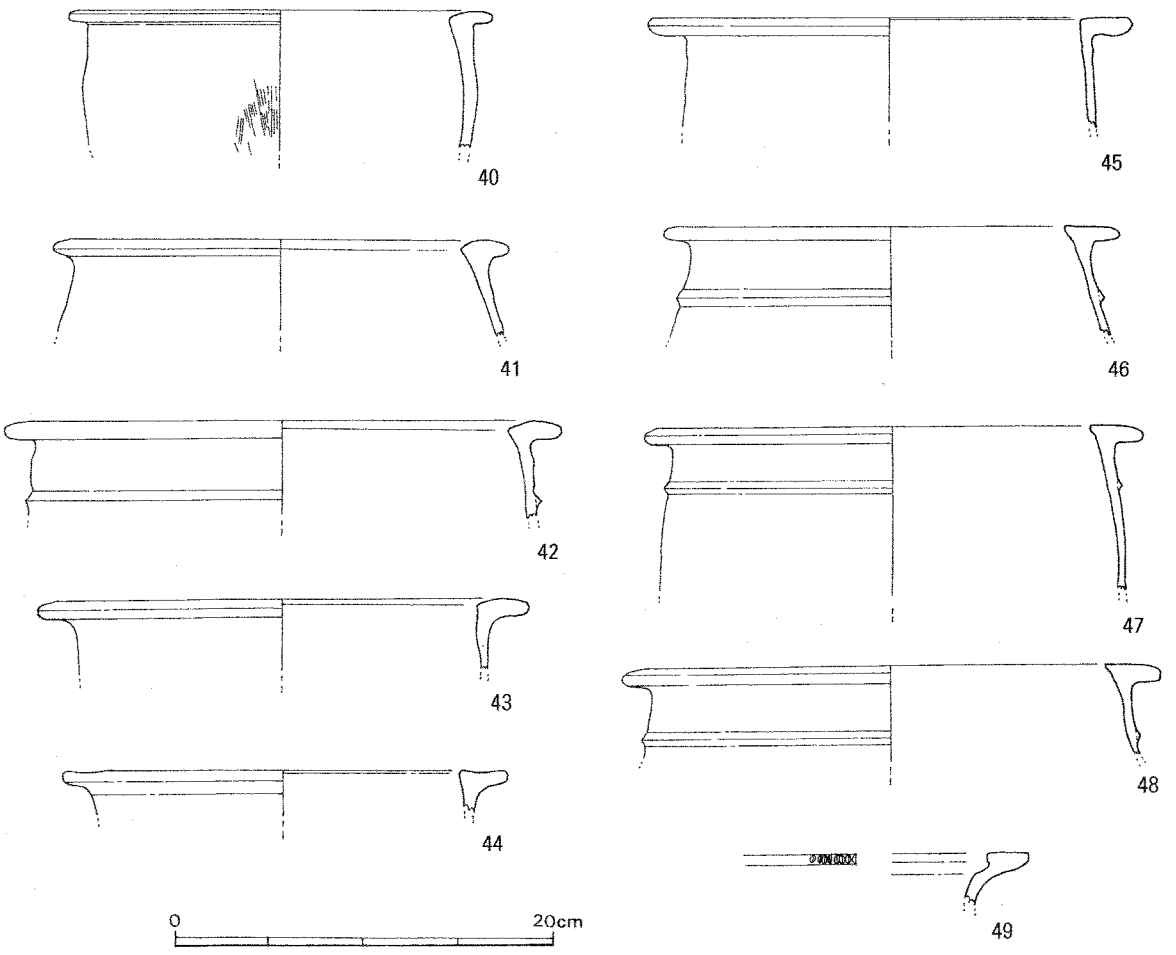
第25図　1号溝（B－1区～B－2区）出土土器②（1／4）



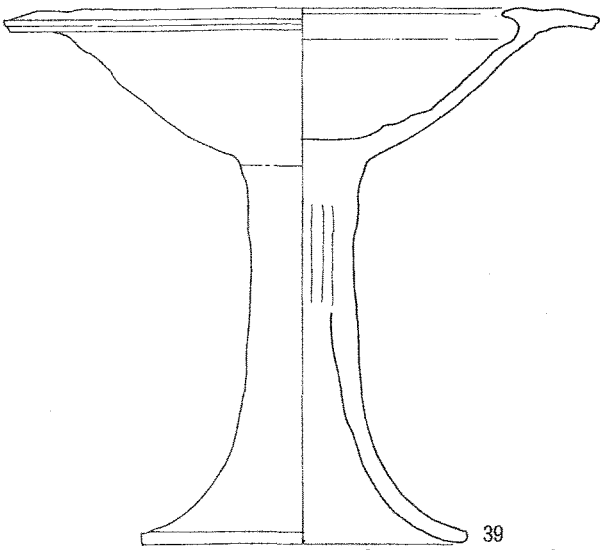
第26図　1号溝（B－1区～B－2区）出土土器③（1／4）

まれる。外側には，3.5cmの間隔で暗文が施されている。27も広口壷である。胎土は灰黄色であり長石や石英粒を含んでいる。三角の突帯が１条めぐらされており，そこから大きく外に向かって広がっている。口縁端部には刻目が入っている。28は，丹塗の長頸壷。胎土には石粒がほとんどみられない。外側，内側ともに丹塗が施されている。29も，丹塗の長頸壷である。口縁部は，風化している。胎土は橙色。石英や長石を含み，M字形の突帯が１条めぐらされている。30は，鋤先状の口縁部を持つ広口壷である。胎土は薄い黄橙色，長石や石英粒が混入している。内側に，指で押さえた痕跡がある。31は，鋤先状の口縁部を持つ広口壷である。口縁端部に丹塗が残る。胎土は薄い黄色，長石や石英粒，金雲母が混入している。

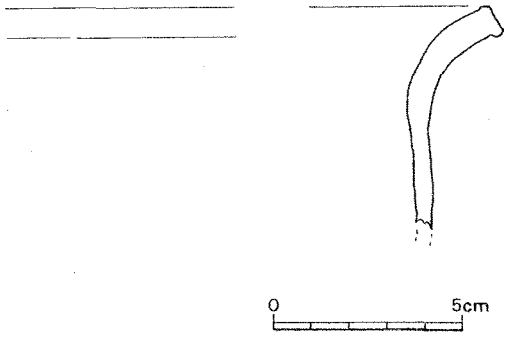
32・33，35・36は，弥生時代中期の鉢である。32は，胎土に長石や石英粒が混入している。33は，コップ形の鉢。胎土は，薄い黄橙色をしており，長石や石英粒が混入している。34は，蓋である。胎土はきめ細かく，にぶい橙色をしている。表面は，丹塗が施されており，なでて仕上げてあり，直径１～２㎜ほどの孔が４カ所あいている。35は，台部に７カ所の長方形透かしを持つ丹塗台付き鉢で，復元口径13.8cm，器高13.0cmである。坏部は，深い身で丸い形状の椀形をなし，口縁端部を丸く収め



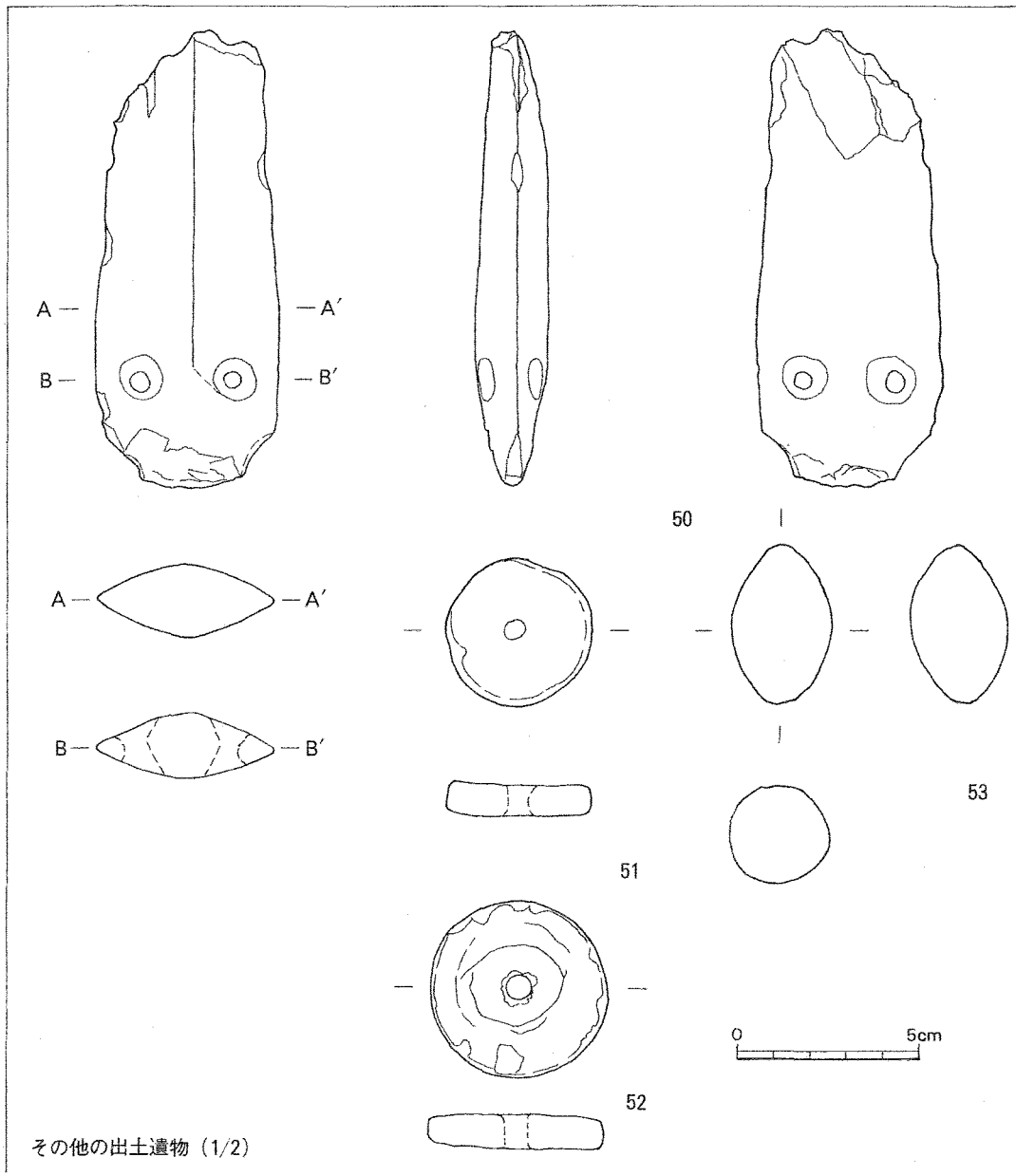
第27図　船着場跡出土遺物（１／４）



1号溝出土土器（1/4）



水田畦畔遺構出土土器（1/1）



その他の出土遺物（1/2）

第28図　1号溝（B－1区～B－2区）船着場跡（A－11区～B－5区～B－6区），
水田畦畔遺構（A－17区～A－18区）その他の出土遺物

ている。全体に分厚い造りで手取りも重い。台部はすそ広がりに開き，幅0.6～1.5cm，長さ5.5cmほどの幅の狭い透かしを作り出している。胎土は，にぶい黄橙色の色調を呈し，器表全面にわたり赤橙色の丹塗を施す。丹塗は透かし部分にも施されていることから，透かしをいれた後に赤彩したことがわかる。36も丹塗台付きの鉢であるが，坏部だけが残っており，透かしは5カ所，口径は，14.7cmでやや大形。

37～39は，弥生時代中期の鋤先状の口縁を持つ高坏。37は，胎土はにぶい黄橙色で長石や石英粒を含む。口縁部内側に，指で横ナデした跡がみられる。38は，胎土は淡い黄色，金雲母が含まれる。39は，胎土は淡い黄色，長石や石英を含んでいるが，全体にわたって風化が著しい。

②船着場跡出土遺物（第27図）

40から48は，須玖Ⅰ式の甕。全部逆Ｌ字形の口縁部である。40は，西突堤の4層から出土した。胎土は灰黄褐色，石英や長石を含んでいる。41は，西突堤の4層から出土した。胎土は橙色，石英や長石を含んでいる。42は，東突堤4層から出土した。胎土は，にぶい黄褐色，金雲母が含まれている。口縁部下に，三角の突帯が1条めぐらされている。43は，西突堤4層から出土した。胎土は，暗灰黄色で石英粒を含む。44は，東突堤の4層から出土し，胎土はにぶい黄橙色，石英や長石を含む。45は，西突堤4層から出土した。胎土はにぶい橙色，石英や長石を含む。46は，西突堤4層から出土した。胎土は灰褐色，長石，石英粒を含む。口縁部下に，三角の突帯が1条めぐらされている。47は，西突堤4層から出土した。胎土は灰褐色，長石や石英粒を含む。48は，西突堤4層から出土した。胎土は明褐灰色で，口縁部下に，三角の突帯が1条めぐらされている。49は，東突堤の4層から出土した壷。胎土は橙色をしており，石英，長石を含み，鉄分が付着している。口縁内部は肥厚しており，段が付いている。また，口縁部には，刻目が施されている。

以上であるが西突堤の場合は，盛土を掘り下げて出土したものであり，東突堤の場合は，石と石の間の清掃中に出土したものであることを考慮に入れていただきたい。

③水田畦畔遺構出土遺物（第28図）

水田畦畔遺構の西端から出土した，弥生時代前期末から中期初頭の如意形口縁を持つ甕。胎土は黄灰色，長石や石英粒を含む。

④その他の遺構からの出土遺物（第18図）

50は，石戈である。Ｂ－3区の2層から出土した。長さ約13cm，幅約5cm，厚さ約2cm。重さ約140g。素材は，暗オリーブ灰色の貢岩製であり，先端部，茎部は欠けている。51は，土製紡錘車である。Ｂ－1区4層（弥生時代の包含層）から出土した。色はにぶい赤褐色。直径約4cm，貫通孔の直径約5mm。重さ約17g。52は，西突堤から出土した暗オリーブ灰色の貢岩製の紡錘車である。直径約4.8mm，貫通孔の直径約7mm。貫通孔を中心にして，使用痕と思われる線が数本刻まれている。53は，土製投弾である。色はにぶい橙色。長さ約4.5cm，直径約2.7cm，重さ約32g。

(4) まとめ

今回の調査の成果は，弥生時代中期前葉に築かれたと推定される船着場跡が確認されたことが大きな成果である。そのほかには，その船着場跡につながると思われる北石組遺構，弥生時代前期末から中期初頭に使用されたと思われる水田畦畔遺構，弥生時代から古墳時代にかけての旧河道，水路に使用されたと思われる溝，防禦のための施設である濠，その他大小のピットが確認された。

船着場跡に関しては，弥生時代において，このように大掛かりな遺構は全国的にも類例がない。遺構の構築については大陸からの技術の導入も考えられ，原の辻遺跡の土木水準の高さを示すものとして大いに評価されよう。そのことは，荷役がしやすいように突堤状の構築をおこなったり，東西の突堤の高さをかえたこと，また，軟弱な地盤に築いた船着場の沈下を防ぐため，西突堤の下に埋まった木材が井桁状に組まれている可能性があること，川の上流側に当たる西突堤にのみ樹皮が敷いてあることなどから考えられる。また，盛土から須玖Ⅰ式の土器が出土されているところから，須玖Ⅰ式土器の新段階の頃に船着き場が構築された可能性が強い。石組遺構は北側の船着場跡に近接しており，何らかの付属施設であることが考えられる。北石組の北側及び南石組の間を船着場跡に出入りするための通路として利用していた可能性も考えられる。今回の調査では確認されていないが，台地部の居住空間に通ずる道路もあったのではないか。今後の調査に期待したい。

水田畦畔遺構は，原の辻遺跡において初めての発見となった。以前に，台地の東側の中濠と外濠との間でプラントオパールが検出され，水田の存在は確認されていたけれども，水田遺構そのものは発見されていなかった。今回の調査によって畦畔遺構が検出されたことによって，台地の西側部分にも水田が広がっていたことが明かになった。

旧河道については，平成６年度から８年度にかけて長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会が調査を行っており，その結果，弥生時代と近世以降の遺構が確認されている。今回の調査で確認された旧河道は，部分的な確認ではあるが，幡鉾川の旧状がかなり蛇行していたということを考えさせる。

溝については，弓形に検出された遺構が特筆されるものと思われる。溝内には，須玖Ⅱ式の土器が廃棄されていたため，弥生時代中期後半には，溝としての機能が停止していたと思われるが，そうすると，溝が機能停止した同時期に，船着場としての機能も停止した可能性が考えられる。また，溝の北側部分に居住空間があった可能性が考えられる。

濠については，２条検出されているけれども，そのうちＤ－２区から検出されたものは，断面がＶ字形をしているが，南面において濠が終了している。以前検出されている環濠との関連の解明が待たれるところではあるが，トレンチ幅が５ｍと限定されているため，今後の調査に期待したい。

以上が，平成８年度に実施した原の辻遺跡，八反・不條・鐙ノ池地区の調査結果であるが，執筆担当者の力不足もあり，分析も不十分な部分が多いけれども，今後，いろいろな機会に補填していきたい。

なお，船着場跡の分析については，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長　工楽善通氏のご指導をいただいた。

図　　版

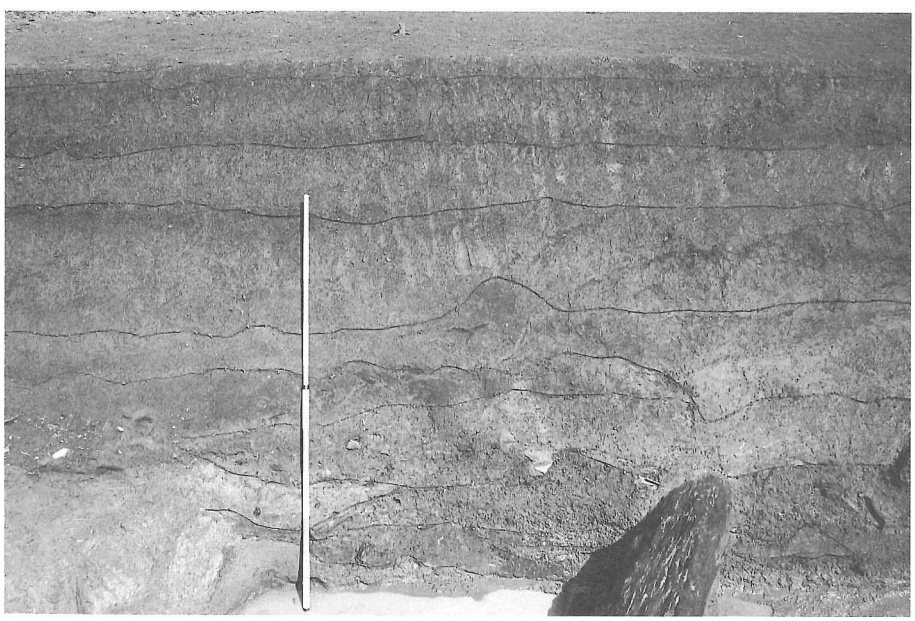
調査区遠景

調査風景

調査風景

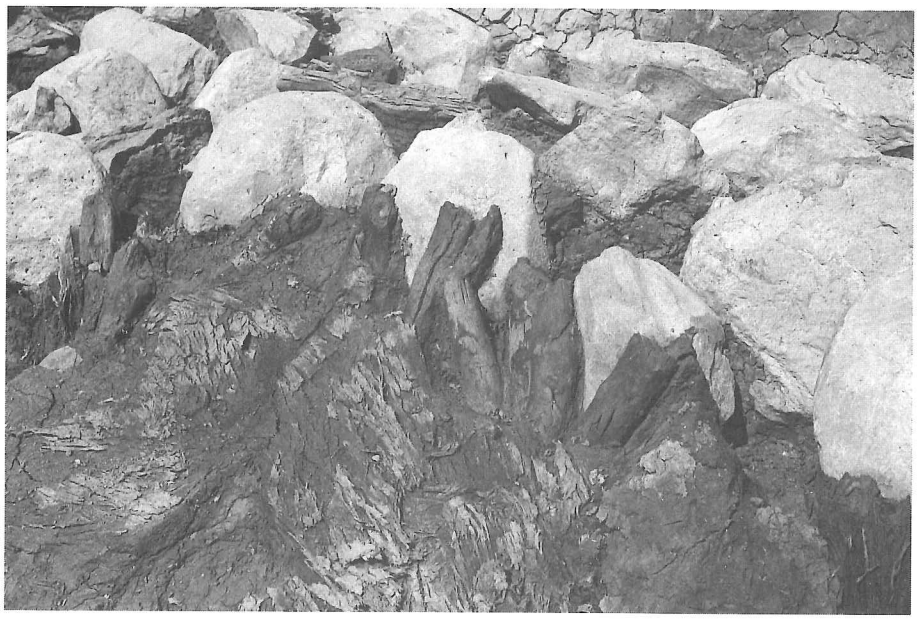
図版 2

A－3 区　1 号旧河道検出状況（南から）

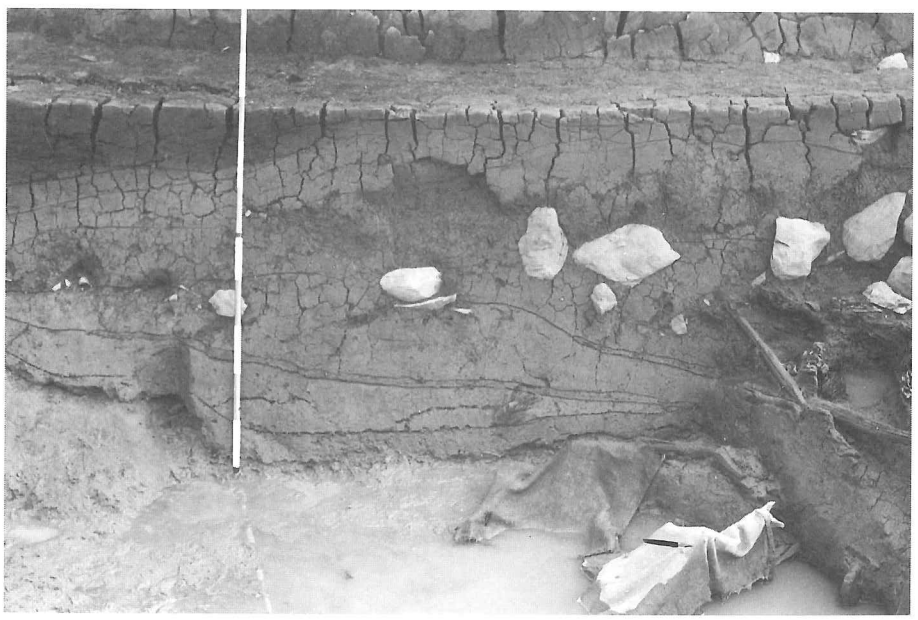


A－3 区　東壁土層

船着場跡検出状況(東から)



船着場跡西突堤補強状況



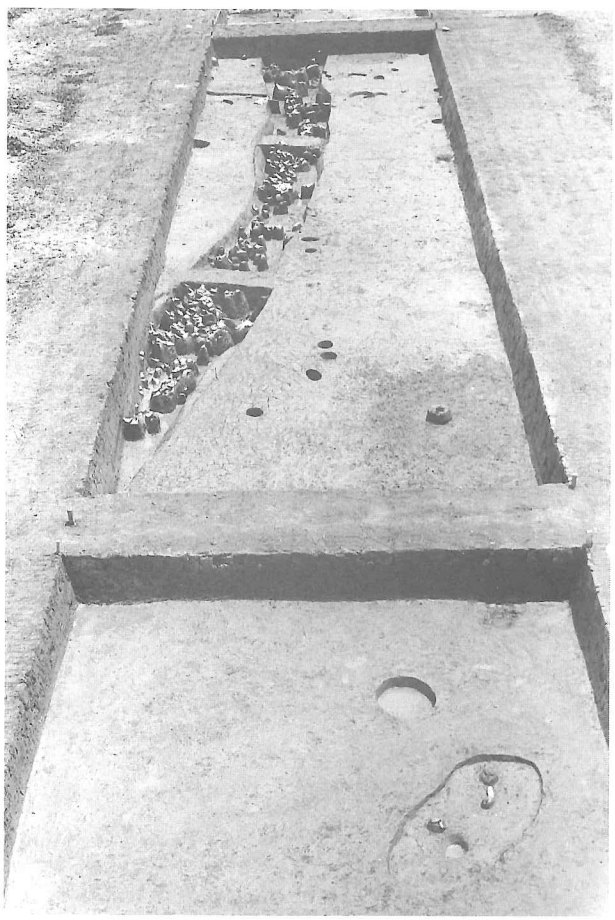
船着場跡南壁土層

図版 4

▲　東突堤検出状況（南から）

▼　東突堤検出状況（東から）

B～1区～B～2区　1号溝検出状況（東から）

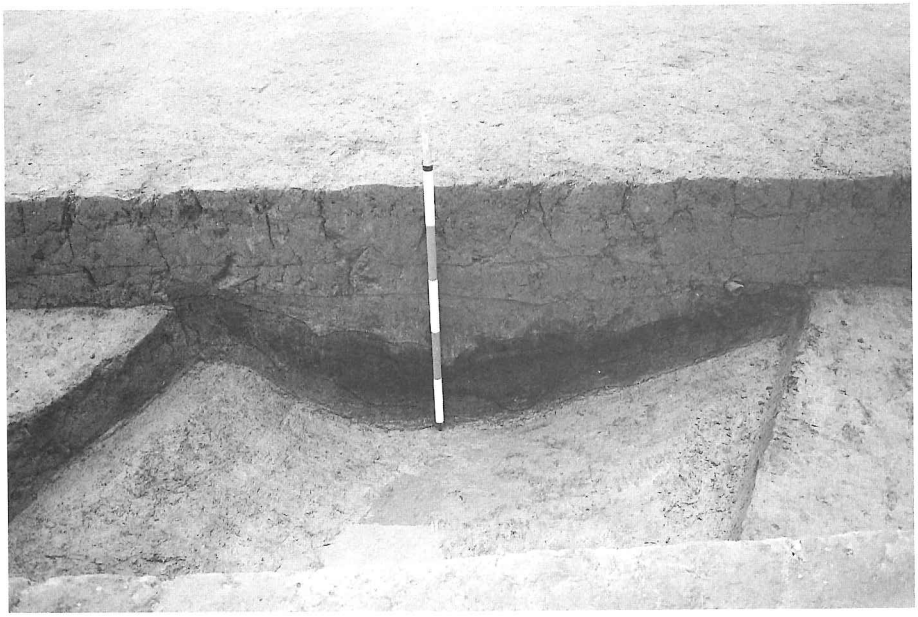


B－2区　1号溝検出状況（西から）

図版 6

D—3区　13，14，15号
検出状況（北から）

D—3区，E—1区
遺構検出状況（西から）

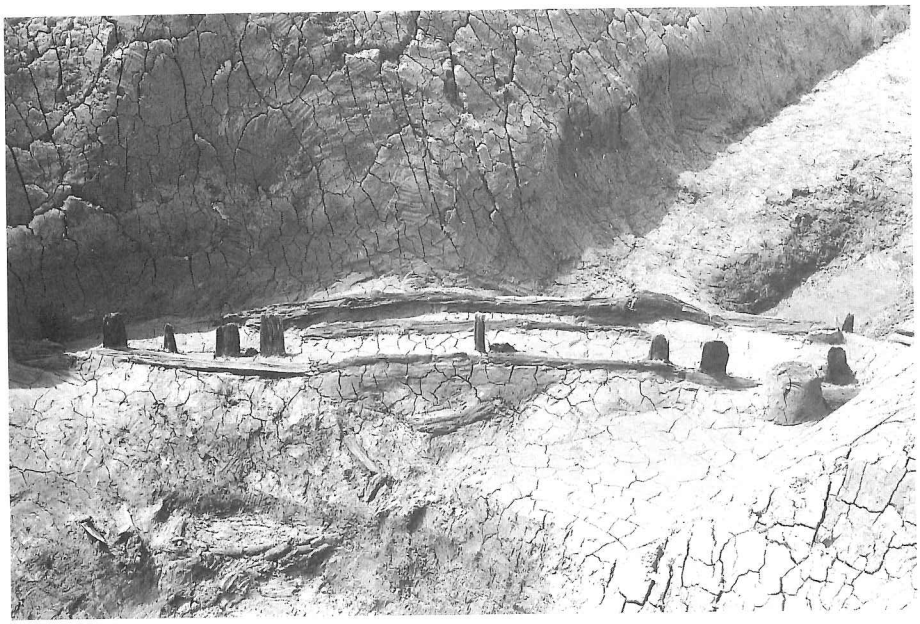


D—3区　南壁土層

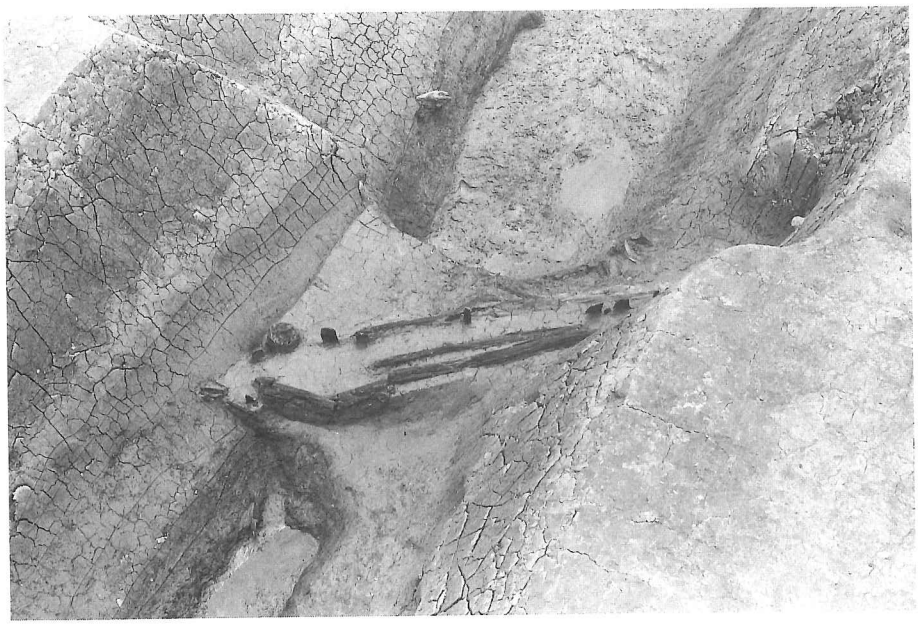
E－6 区　3 号旧河道，21号溝，22号溝検出状況（南から）

E－7 区　3 号旧河道検出状況（南から）

図版 8

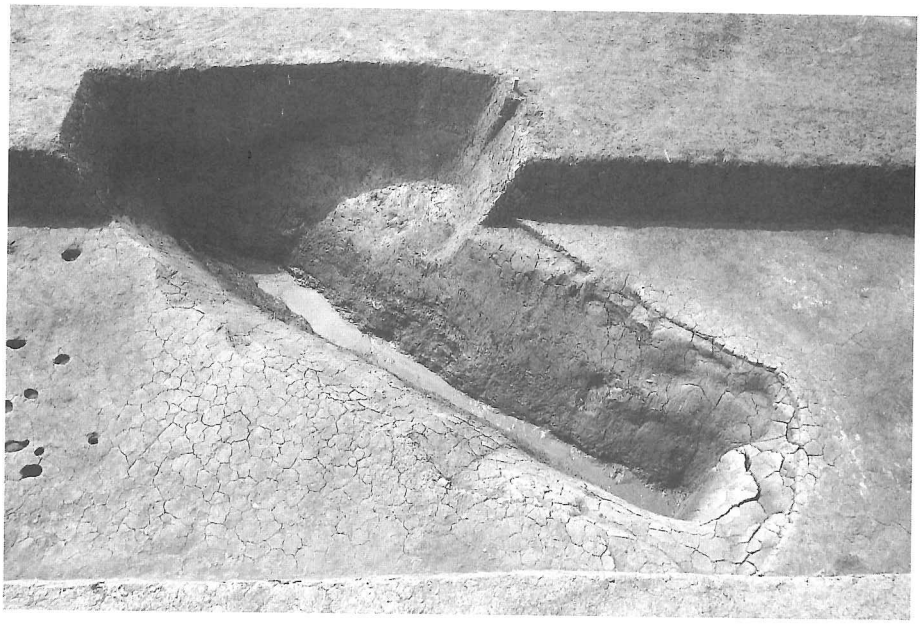


A—17区～A—18区
水田畦畔遺構検出状況
（東から）

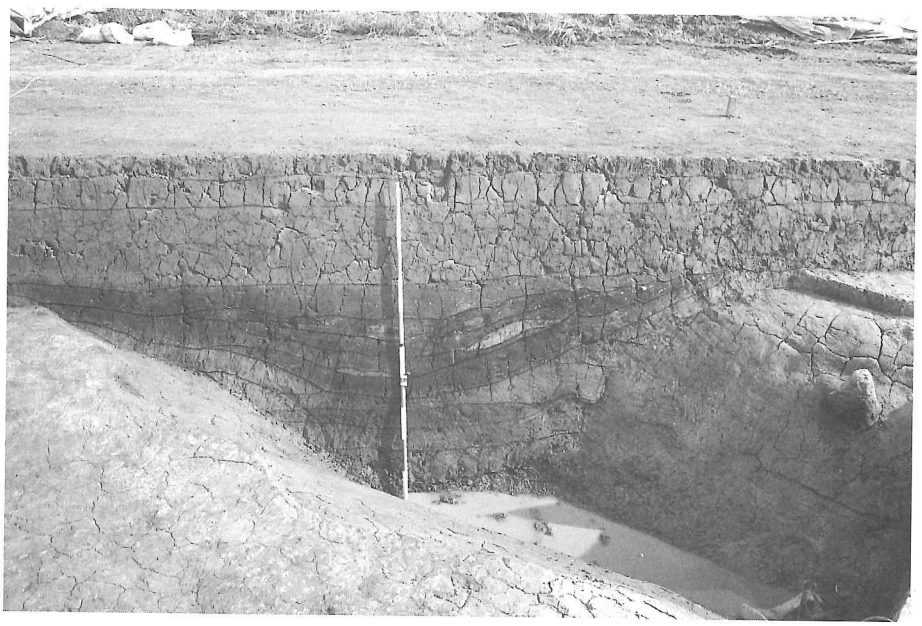


A—17区～A—18区
水田畦畔遺構検出状況
（東から）

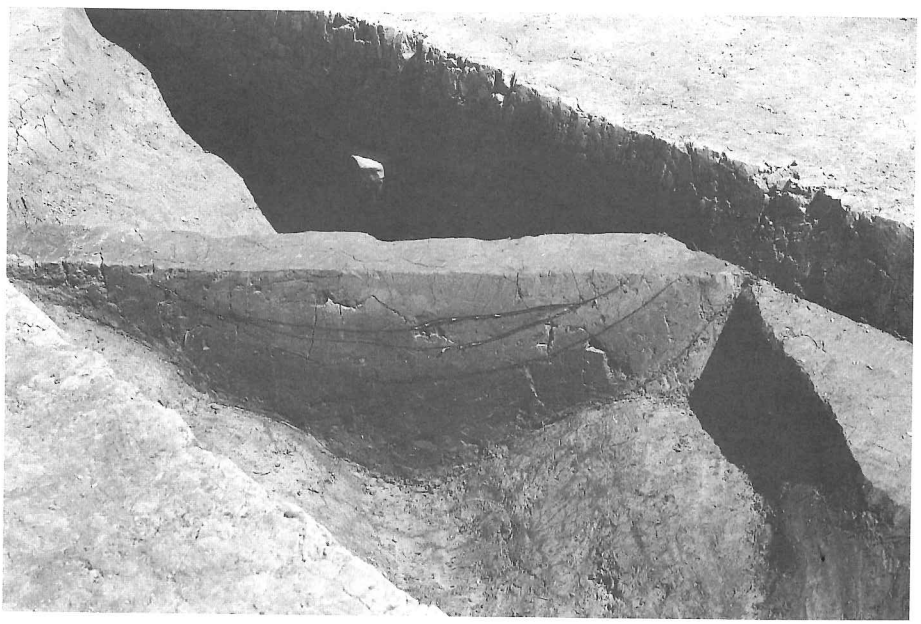
A—17区～A—18区
水田畦畔遺構東壁土層



D— 2 区　2 号濠
検出状況（南から）

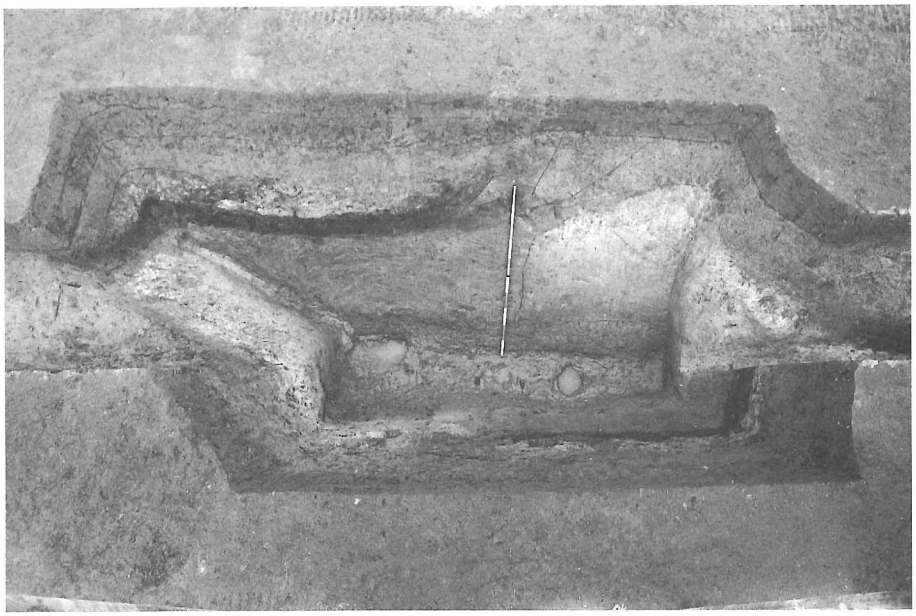


D— 2 区
2 号濠南壁土層



D— 2 区
2 号濠南東壁土層

図版10



A—24区　1号濠
検出状況（西から）

A—24区
1号濠　東壁土層

A—9区　東壁土層

鐙ノ池地区遠景

鐙ノ池地区作業風景

F－1区
検出状況（南から）

2．平成 8 年度原の辻遺跡(芦辺町教委分)の調査

2．平成8年度原の辻遺跡（芦辺町教委分）の調査

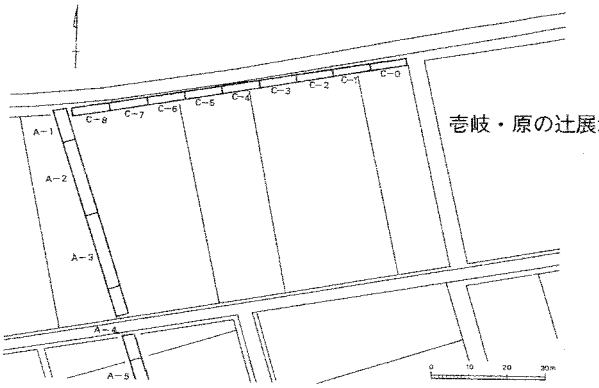
(1) 調査概要

幡鉾川流域総合整備事業（平成4年度～平成13年度）に係る県営圃場整備事業に伴い，原の辻遺跡西側周辺（1－9工区）[1]の工事が計画された。関係機関と協議の結果，調査対象面積1,770㎡の20％に当たる道路計画域354㎡について，平成8年度の国庫補助を受け緊急に調査を実施することとなった。

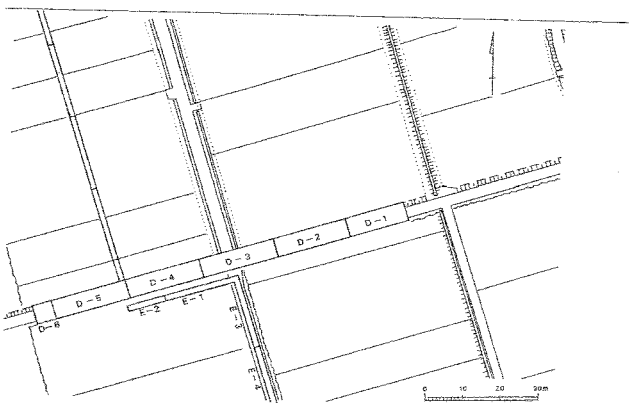
①調査関係者　調査関係者は以下のとおりである。

芦辺町教育委員会		長崎県教育庁
教育長	末永　雅照	原の辻遺跡調査事務所
教育次長	辻本　　正	文化課
社会教育主事補	山口　信幸	
文化財指導員	松永　泰彦（現場調査担当）	

②調査方法（第1図）　調査は平成8年6月3日から平成8年10月21日の期間で，対象地区の北側のK1－24号道路[2]予定地をC区，南側の1－53号道路[3]予定地をD区とした。C区は，平成6年度（高原地区）と同じ理由により，現況道路の拡幅部分に幅2mのトレンチを設定した。バックホーで表土約0.2mを剝ぎ取った後，東側から10m毎にC－0～C－8までの記号番号を付した。D区は幅5mの道路幅一杯にトレンチを設定し，基本的に20m毎に東からD－1～D－6と記号番号を付した。芦辺町教委は面積の関係で，D－4～D－6までを担当した。C区とD－4～D－6の調査面積は445㎡である。

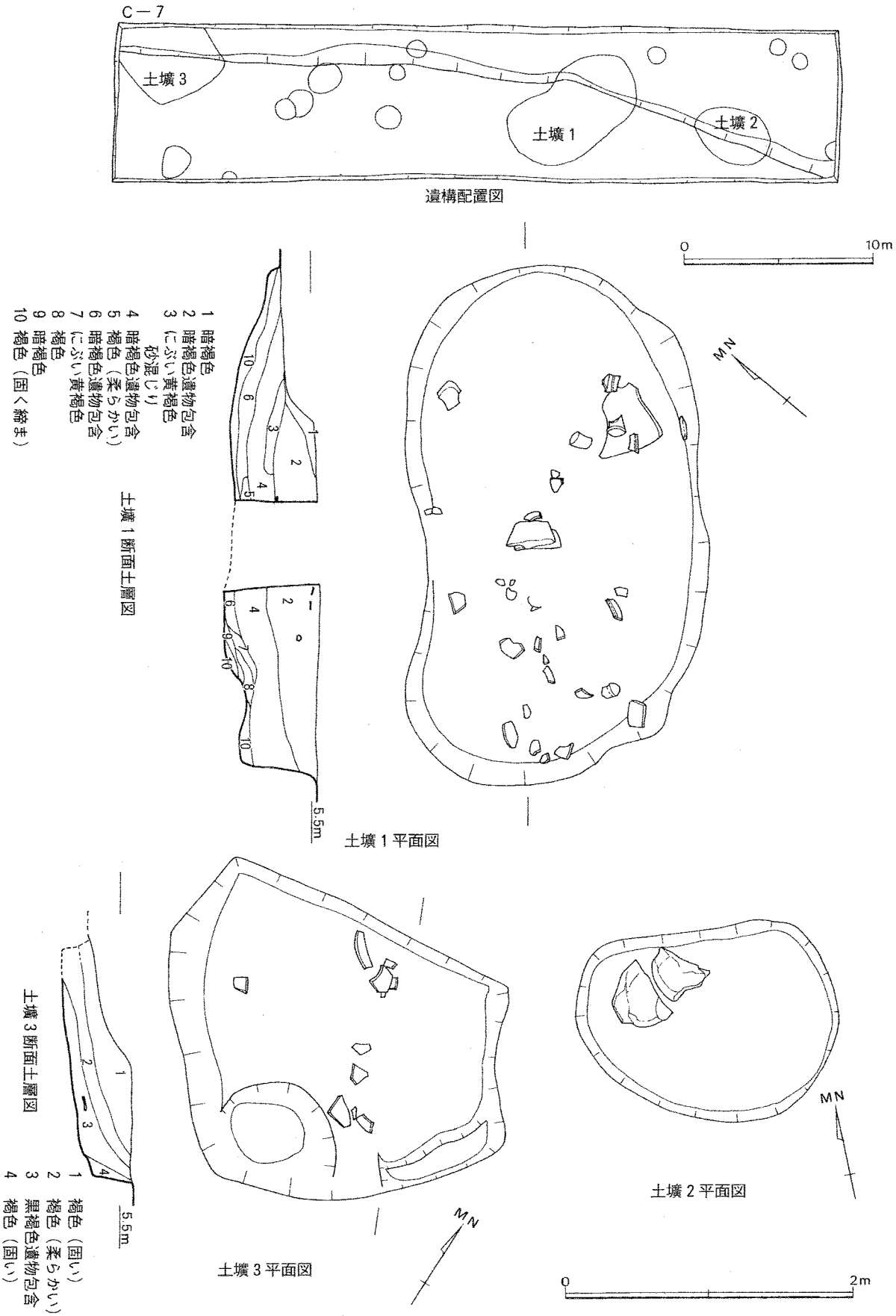


不條地区C区トレンチ

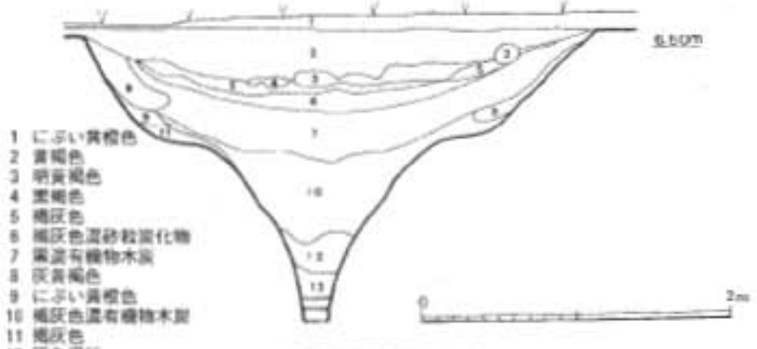

八反地区D区トレンチ

第1図　トレンチ位置図

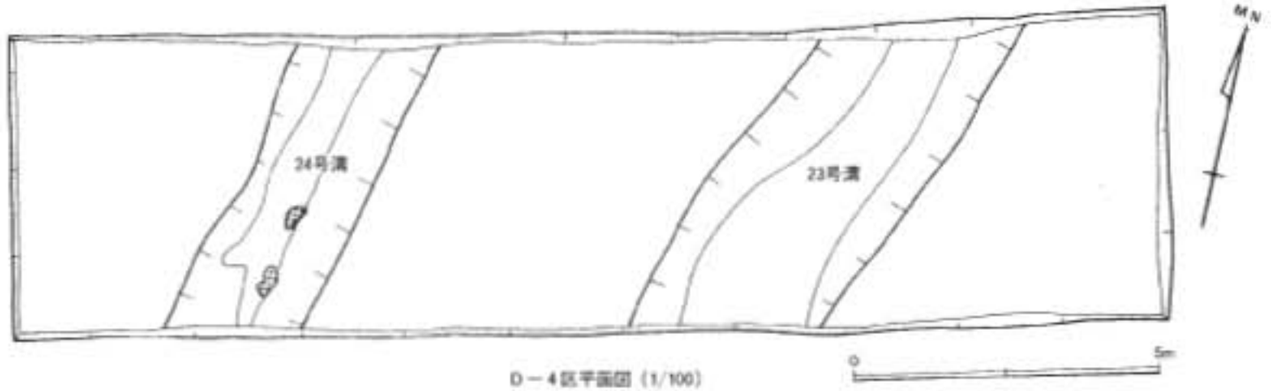
③土層　層位は，C－0区からC－1区までは埋土撹乱層である。C－2区の層位は，第2層はにぶい黄褐色である。第3層は砂混りの暗褐色である。第4層は，黒褐色に褐色の土がブロック状に入っていた。第5層は第3層より明るめの砂混りの暗褐色である。第6層は第3層と同じである。第7層は暗オリーブ褐色粘質土である。C－3区では，第2層が暗褐色である。第3層は柔らかく，にぶい黄褐色に明褐色土を含んでいた。第4層は暗褐色で鉄分を含んだ土が混っていた。第5層は褐色である。第6層は暗褐色で弥生時代の遺物を含む。第7層は暗褐色に褐色の混った土で弥生時代の遺物を含む。また，第7層までを第2・3・



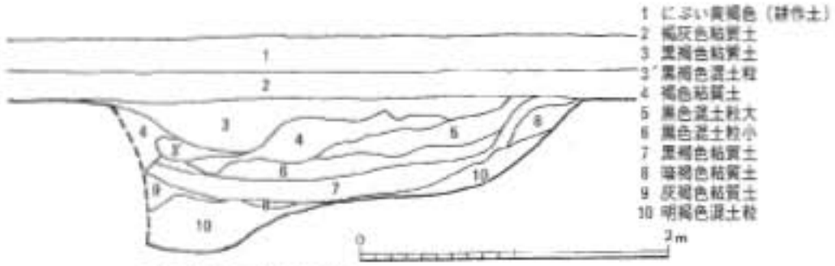
第2図　C－7区遺構実測図



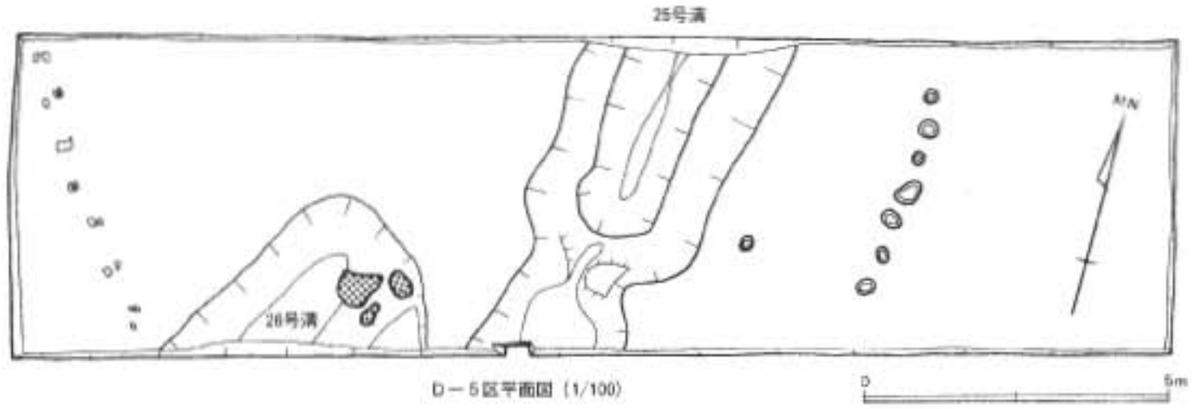
25号溝土層図北壁（1/40）



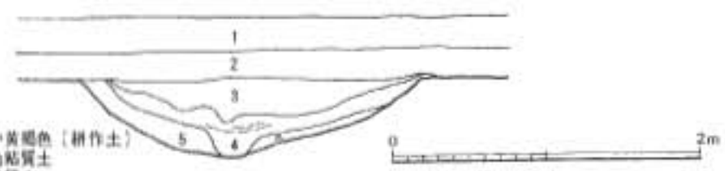
D－4区平面図（1/100）



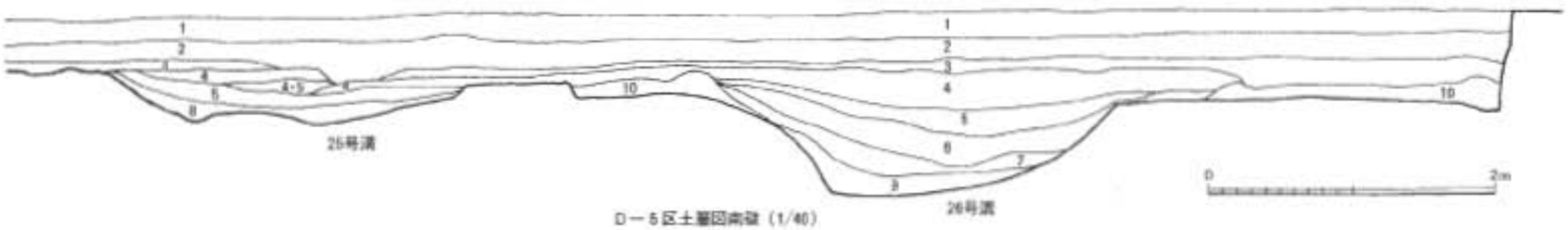
23号溝土層図南壁（1/40）



D－5区平面図（1/100）



24号溝土層図南壁（1/40）



D－5区土層図南壁（1/40）

第3図　D区土層・平面図

4層が切っている。第8層は暗褐色の遺物包含層である。第9層は灰黄褐色の遺物包含層である。第10層は暗褐色である。

(2) 遺　構

遺構は，C－0・1区では，旧河道の埋め立て土で，平成7年度の河川緊急調査のように弥生の包含層が予測できたが，軟弱な土壁であり崩落の恐れがあったため1m掘ったところで調査を断念した。C－2区はトレンチ西側で弥生時代の土壙を検出した。長さ2m，幅1.3m，深さ0.7mを計る不整形な土壙である。内から丹塗り研磨の高杯や広口壷などが出土した。C－3・4区では弥生時代の包含層を検出した。第6層と第7層，第8層と第9層に遺物が見られたが，第6層と第7層は旧圃場整備時の埋土層と思われる。第8層からは須玖IIの段階の甕や胴部にM形凸帯をもつ広口壷などが，潰れた状態で出土した。また，C－3・4区のベルト部分は緩やかに窪み，深さも1mと深く北側へ傾斜するのを確認した。C－5・6区はベルトの部分で近世以降の溝を検出した。幅約4m，深さ0.25mを計り，北西方向に走る。遺物は弥生土器のほか中世，近世の土器，陶磁器などが出土した。C－7区（第2図・図版2）では土壙3基と柱穴12個を検出した。土壙は隅丸方形と思われるのが1基と長円形が2基である。土壙1は長さ1.8m，幅1m，深さ0.3mを計る。土壙2は長さ0.9m,幅0.7m，深さ0.3mを計る。土壙3は検出部分の長さ1m，幅1.1m，深さ0.2mを計る。いずれも弥生土器片が出土したが土壙の性格は不明である。C－8区ではC－7区土壙3の一部をトレンチの北東隅で確認した。ほかにも土壙1基と柱穴4個を検出した。D－4区（第3図・図版3）では南北に走る溝を二条検出した。東から23号溝，24号溝と符号した。23号溝は幅約3m，深さ0.8mを計る。24号溝は23号溝の約5m西側に平行して走る。幅約2m，深さ0.6mを計る。D－5区（第3図・図版3）も溝を二条検出した。24号溝から西に約11m離れている。これもやはり南北方向に走る。25号溝と符号した。掘り始めのうちは23号溝や24号溝と同じく断面は「U」字形と考えていたが，掘り進むにつれV字溝（図版8）である事が分かった。上幅3.5m，下幅0.15m，深さ1.9mを計る。また25号溝は北側から3mの部分で溝の形態が変わり括れ，幅が1.3mとなる。括部は段差が1.4mほどあり，南側が高くなっている。括部は長さ1mほどで，幅2m，深さ0.3mの「U」字形の溝となる。括部の2m西から26号溝が始まる。幅2.4m，深さ0.7mを計り，ほぼ南へ走る。

(3) 遺　物

この調査区では総点数8,084点が出土した。遺構からの出土数は1,123点で14%程度である。出土量が多いのはC－3区～C－5区が6,445点と全体の80%と優位を占める。C－2区土壙1からは甕・壷・高杯など137点の弥生土器が出土した。破片数からの割り出しであるが甕89%，壷9%，高杯2%と甕の数が大部分を占めている。土壙には丹塗りの土器片4%も含まれていた。時期は須玖IIの段階と思われる。C－7区土壙1は94点の土器片が出土した。内訳は甕38点，壷14点，高杯1点，丹塗り小片2点，不明38点である。時期は須玖IIと考える。数量には入れなかったが，上面から無文土器の底部が城ノ越・須玖Iを伴って出土した。C－7区土壙2からは二枚の板状石と土器片16点が出土した。甕口縁部2点，胴部11点，底部1点，不明2点である。C－7区土壙3の出土数は79点で甕14点，

壷５点，蓋１点，不明59点である。時期は須玖Ⅰ古段階から須玖Ⅱまで見られた。Ｃ－８区土壙１の出土数は79点で甕６点，壷３点，蓋２点，器台１点，無文土器１点，不明10点である。また重さ9.4ｇ～1.7ｇの焼土粒６点も伴った。前期末～須玖Ⅰの遺物が見られた。Ｃ－８区柱穴１から土師器皿の底部が出土したことで，Ｃ－７区～Ｃ－８区の柱穴群は中世以降の時期も考えられる。Ｄ区はＤ－４区23号溝から小片ながら15点，24号溝から71点が出土した。23号溝からは布留系の甕形土器口縁，24号溝からは山陰系の複合口縁甕が出土したことから時期は古墳時代初頭～前葉に位置づけられよう。Ｄ－５区26号溝も山陰系の複合口縁壷が出土した。26号溝も同時期と考えられる。このほかにＣ－４区（図版１）３層から無文土器の口縁部，Ｃ－５区３層から無文土器の底部も出土している。

(4) ま と め

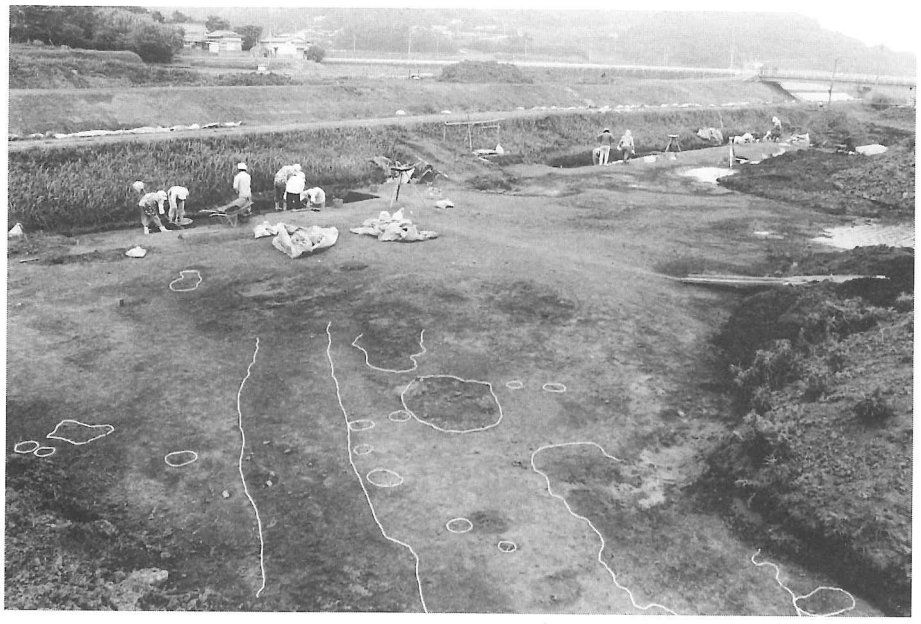
当初Ａ－１～９区までとＣ区全区を調査する予定であったが，圃場整備の工事工程の関係で範囲確認調査を先行して実施した。その間に，県の調査が始まりＡ区から着手されたために調査区を変更しＣ区とＤ－４～６区を担当するようにした。

Ｃ区では近世以降の溝状遺構，土壙，柱穴，包含層を確認できた。Ｄ区では古墳時代初頭以降の溝が三条とＶ字溝を確認した。ここでは25号溝と符号したが，１号濠に続く濠の可能性が大であり，本来なら25号溝の形態の変わる括部で区別するべきかも知れない。溝の検出長が短く確証はないが，自然の流路とは考え難い形態と考えられる。またこの形態のＶ字溝は，平成５年度原の辻遺跡緊急調査[4]のＶ区Ｕ９－28区の10号溝，平成６年度芦辺高原地区[5]のトレンチ第２区の１号溝に酷似するが，距離的に離れ過ぎており現時点で環濠とは呼べない。調査が進展するにつれ，徐々にＶ字溝の距離が詰まっていくのではないだろうか。今後の調査に期待したい。

註

(1) 県営圃場整備事業壱岐地区（原の辻西１－９・２－１工区）計画平面図　1994
(2) (1)に同じ
(3) (1)に同じ
(4) 山下英明『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書124集　長崎県教育委員会　1995
(5) 松永泰彦「芦辺高原地区」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書１』長崎県教育委員会　1996

図　　版



調査風景

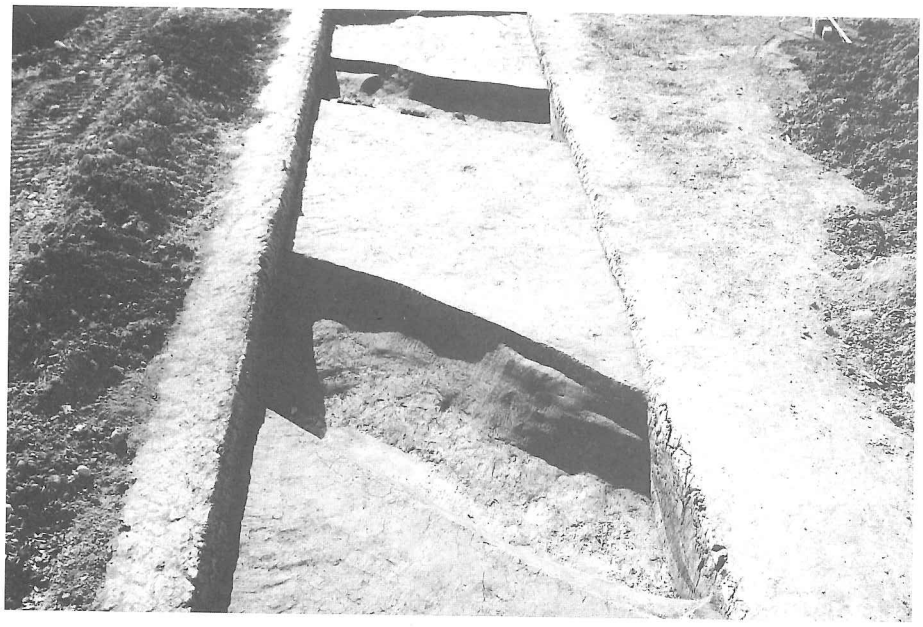
C－7区　土壙1土層

C－4区
無文土器出土状況

図版 2

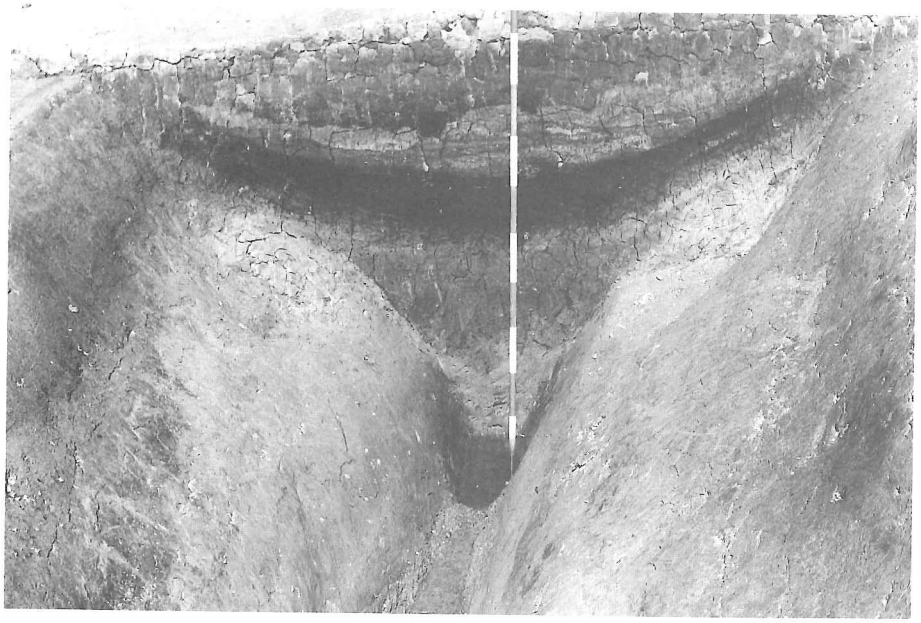
C－7区　遺構検出状況

D－4区～D－6区
全景



D－4区
ＳＤ23号，24号溝

D－5区
ＳＤ25号，26号溝



ＳＤ25号溝
土層断面（北壁）

3．平成8年度鶴田遺跡の調査

3．平成8年度鶴田遺跡の調査

(1) 遺跡の立地

鶴田遺跡は，壱岐島最大の平野である深江田原の南側から張り出した舌状台地の周辺にあり，弥生時代の大規模環濠集落である原の辻遺跡の西側約300mの位置にある。遺跡の標高は8～10m，現状は水田で，地籍は石田町池田仲触字大桑である。

(2) 調査経緯と関係者

壱岐地区における県営圃場整備に伴って，鶴田遺跡に関しても平成3年度に遺跡の範囲確認調査が行われた。この結果に基き，工事にかかる農道部分について発掘調査を実施することとなった。調査は，長崎県教育委員会と石田町教育委員会が担当した。調査関係者は以下のとおりである。

原の辻遺跡調査事務所　所長　田川　肇　　課長　安楽　勉・岩永　道雄　　主査　松嶋　繁昭
文化財保護主事　川口　洋平（現場調査担当）
石田町教育委員会　教育長　町田　忠治　　社会教育係　河合　雄吉（現場調査担当）

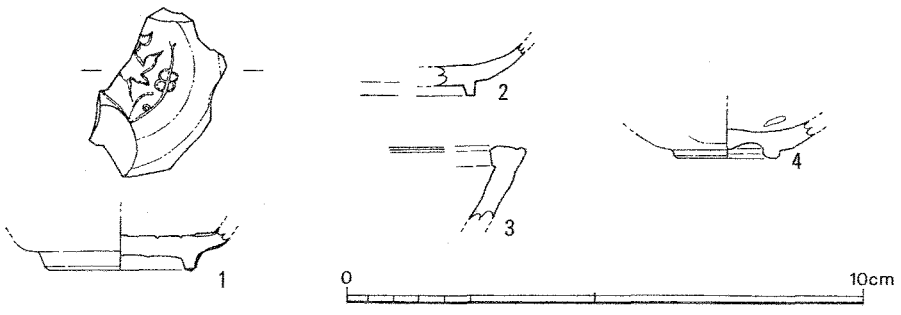
(3) 調査概要

①調査方法（第3図）　調査は，工事区域に従い，5m×20mを基本とするグリッドを北からA，B，C，Dと設定して行った。A～C区は県教委が調査を担当した。調査面積は302m²で，平成8年11月11日から12月9日まで実施した。D区は町教委が担当した。調査面積は125m²で平成9年12月9日から12月19日まで実施した。掘り下げは，表土を機械，以下を人力によった。

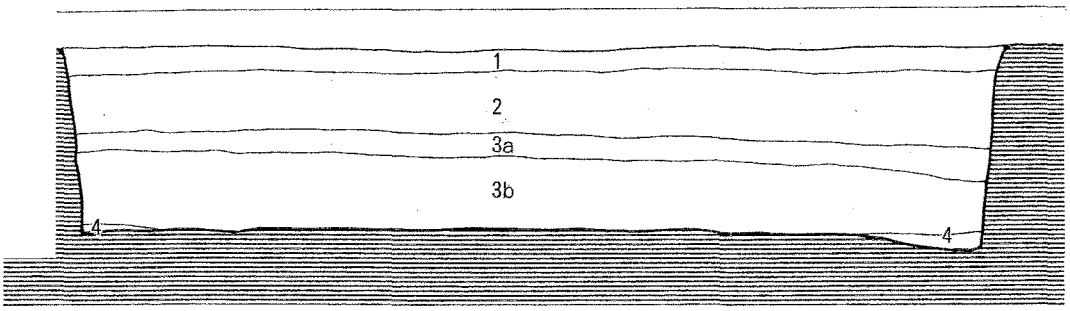
②土層（第2図）　第1層は表土で水田の作土である。第2層はやや赤味をおびた茶褐色土層で水田の床土と考えられる。撹乱による中近世の遺物を含んでいる。第3a・b層はフカフカとした茶褐色土層で上部から旧石器時代の石器が数点出土した。第4層は黄褐色の基盤層である。

③遺構・遺物（第1図）　調査区において遺構は検出されなかった。第2層から出土した遺物を図化した。1は龍泉窯系青磁碗の底部で，見込みにスタンプによる草花文が施される。2は黄褐色の胎土をもつ白磁小碗の底部である。3は口縁端部が内側に突出する，いわゆる周防系の瓦質のすり鉢である。4は赤みがかった橙色の胎土に緑灰色釉がかかる唐津系の皿である。

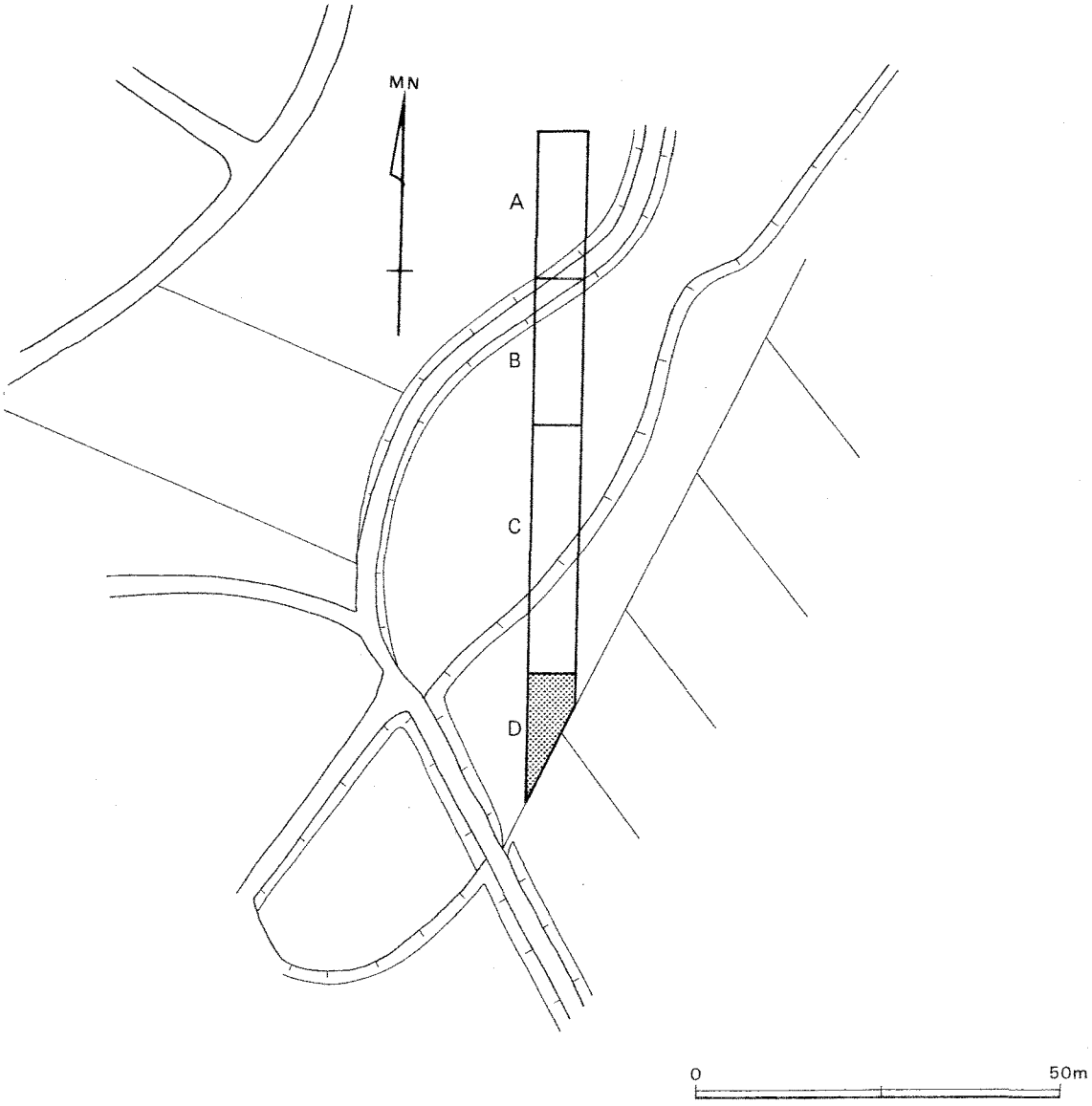
④まとめ　今回の調査では，弥生時代の遺構・遺物が確認されなかったが，撹乱によるものとはいえ中世後期から近世初頭の遺物が出土した。付近にはこの時期の集落等が存在が想定される。また，旧石器時代の文化層についても，今後の検討の余地をのこしている。



第1図　出土遺物実測図（1／3）



第2図　C区北側土層図（1／40）



第3図　調査区域図（1／1,000）　※網点は石田町調査地域

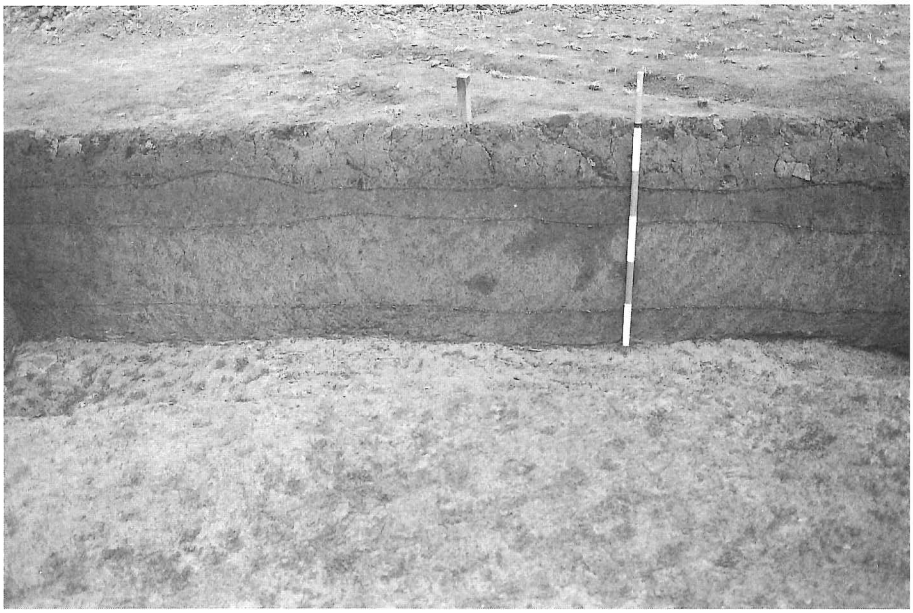
図　　版

調査遠景

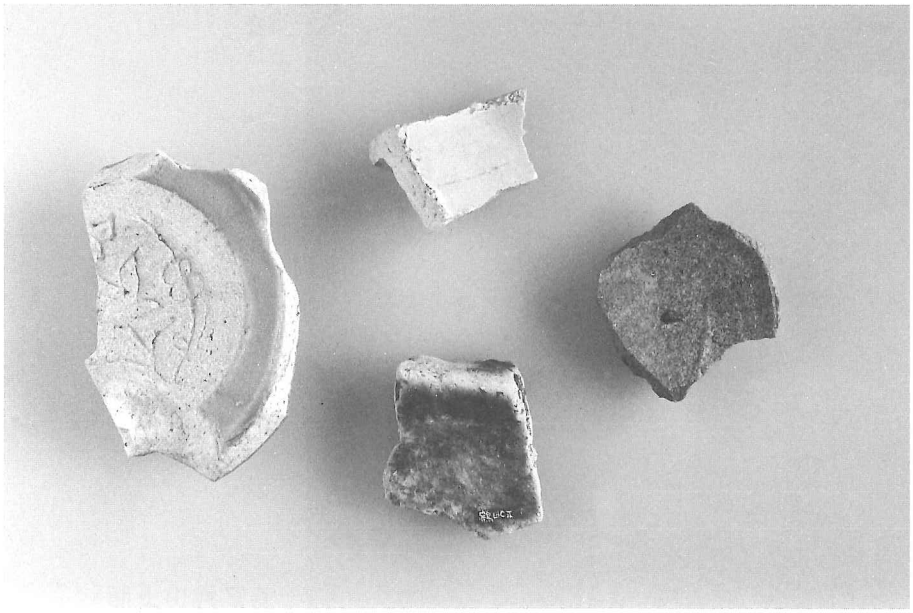
A区地山上面

B区西側土層

図版 2



C区西側土層



出土遺物

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき　つるたいせき
書名	原の辻遺跡・鶴田遺跡
副書名	幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書III
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	西　信男・川口洋平・松永泰彦
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-0861 長崎県長崎市江戸町2番13号
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
原の辻遺跡 (不條・八反・鐙ノ池地区)	長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触	42423	92	33° 44′ 31″	129° 45′ 01″	19960513 〜 19961112	2,044 ㎡	圃場整備
鶴田遺跡	長崎県壱岐郡石田町池田仲触	42424	5	33° 45′ 18″	129° 44′ 56″	19961111 〜 19961209	304 ㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡 (不條・八反・鐙ノ池)	集落遺跡	弥生時代	船着場跡 石組遺構 水田畦畔遺構 溝 濠 旧河道 柱穴	弥生時代の土器 石器 木器	
鶴田遺跡	散布地	弥生時代	遺構検出せず	旧石器 中世〜近世の陶磁器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第4集

原の辻遺跡・鶴田遺跡

1998．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷